

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

兵庫県文化財調査報告書 第105冊

永久保存（10-5）

尼崎市

上ノ島遺跡

平成4年3月

兵庫県教育委員会

尼崎市

上ノ島遺跡



平成4年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、兵庫県公営住宅尼崎立花第1団地改築工事に先立ち、兵庫県都市住宅部住宅建設課の委託を受けて、兵庫県教育委員会が昭和62年度に実施した上ノ島遺跡（尼崎市上ノ島野上町所在）の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は、藤田 淳・大平 茂が行った。分担は以下の通りである。

第1章、第2章、第3章、第4章第1・3・4節、第6章	大平 茂
第4章第2節	藤田 淳
3. 花粉分析はパリノ・サーヴェイ（株）に委託し、その結果を第5章として掲載した。
4. 本書の編集は、執筆者の協議のもとに、大平が行い、吉井京子が補佐した。
5. 遺構実測は、調査参加者全員が行い、遺構写真は調査員が撮影した。遺物実測、遺構トレース、遺物トレースは嘱託員が行った。遺物写真は（株）日之出カメラに委託した。
6. 本書に使用した方位は磁北であり、レベルは大阪湾平均海水準（O.P.）である。
7. 遺物の記載番号は、本文・挿図・図版と同一番号にしている。
8. 土器実測図のうち、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器は断面黒塗り、須恵器・陶磁器は断面白抜きで表現した。
9. 本報告にかかる出土遺物及び写真関係等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と兵庫県教育委員会魚住分館にて保管している。
10. 発掘調査にあたり、住宅建設課、尼崎市教育委員会及び地元上ノ島の方々にご協力を頂いた。記して深く感謝するものである。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査概要とその組織体制	2
1.	確認調査	2
2.	全面調査	2
3.	整理調査	5
第2章	遺跡をとりまく環境	7
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	8
第3章	調査の記録	10
第1節	遺跡の立地と基本堆積土層	10
第2節	検出遺構と遺物出土状況	13
1.	弥生時代前期 南区 溝1・2・3	13
2.	平安時代後期 北区 溝4・土壤1	14
3.	鎌倉時代 南区 水田	16
4.	江戸時代 南区 水田	16
	北区 水田（畑）	16
第4章	出土遺物	19
第1節	土器	19
第2節	石器	31
第3節	木器	42
第4節	その他	42
第5章	花粉化石からみた弥生時代以降の環境変遷	43
第6章	まとめ	53
	遺跡の性格とその位置づけ	

挿 図 目 次

第1図	トレンチ作業風景	1
第2図	調査地位置図	3
第3図	確認トレンチ及び全面調査区設定図	4
第4図	断面上層剥ぎ取り風景	6
第5図	上ノ島周辺の遺跡分布地図	9
第6図	遺跡土層断面図	11・12
第7図	南区 弥生時代前期遺構配置図	13
第8図	溝2・3 土層断面図	14
第9図	北区 平安時代後期遺構配置図	15
第10図	北区 溝4・土壤1平面図、断面図	15
第11図	北区 江戸時代烟遺構平面図	17
第12図	現地説明会風景	17
第13図	発掘作業風景	18
第14図	南区 溝1出土土器	19
第15図	南区 溝2出土土器	20
第16図	南区 溝3出土土器 (1)	21
第17図	南区 溝3出土土器 (2)	22
第18図	南区 溝3出土土器 (3)	23
第19図	南区 微高地上包含層(12層)出土土器	24
第20図	南区 包含層(第11層)出土土器 (1)	25
第21図	南区 包含層(第11層)出土土器 (2)	26
第22図	南区 包含層(第11層)出土土器 (3)	27
第23図	北区 包含層(第9・10層)出土土器	28
第24図	北区 溝4出土土器	28
第25図	南区 鎌倉時代水田層(第7層)出土土器	29
第26図	北区 包含層(第8層)出土土器	29
第27図	北区 江戸時代畑上層洪水砂出土土器	29
第28図	石器 (1)	31
第29図	石器 (2)	33
第30図	石器 (3)	34
第31図	石器 (4)	35

第32図 石器 (5)	36
第33図 石器 (6)	38
第34図 石器 (7)	39
第35図 石器 (8)	40
第36図 出土石器長幅散布図	41
第37図 木器	42
第38図 石帶	42
第39図 試料採取地点図	44
第40図 試料採取地点の模式柱状図	44
第41図 南トレーンチ南壁採取試料の花粉化石群集の変遷図	48
第42図 花粉化石の顕微鏡写真 (1)	49
第43図 花粉化石の顕微鏡写真 (2)	50
第44図 花粉化石の顕微鏡写真 (3)	51

表 目 次

第1表 石器一覧表	41・42
第2表 花粉分析結果表	47

図 版 目 次

図版 1	上	調査地区遠景	
	下	南区 弥生時代溝1・2・3全景	(東から)
図版 2	上	南区 溝2土器出土状況	(東から)
	下	南区 微高地土器出土状況	(東から)
図版 3	上	南区 溝1土層断面	(北から)
	下	南区 近世遺構面(水田)	(西から)
図版 4	上	北区 平安時代遺構面と近世畠	(西から)
	下	北区 溝4全景	(西から)
図版 5	上	北区 土壇1全景	(西から)
	下	北区 石帶出土状況	(南から)

図版6	上 北区 近世遺構面（地）	(西から)
	下 北区 近世遺構面（足跡）	(南から)
図版7	上 確認 西トレンチ	(南東から)
	下 確認 西トレンチ 溝3土器出土状況	(東から)
図版8	上 確認 南トレンチ	(北東から)
	下 確認 中トレンチ	(西から)
図版9	弥生土器	
図版10	弥生土器	
図版11	弥生土器	
図版12	弥生土器	
図版13	弥生土器	
図版14	弥生土器	
図版15	弥生土器	
図版16	須恵器、土師器	
図版17	須恵器、土師器、灰釉陶器、弥生土器、瓦器、黒色土器	
図版18	陶磁器、瓦器、須恵器、土師器、木器、石器	
図版19	石 器	
図版20	石 器	
図版21	石 器	
図版22	石 器	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

兵庫県都市住宅部住宅建設課では、阪神間及び神戸市の人口密集地域の県公営住宅の老朽化に伴って、土地の有効利用を図るために高層化する改築を進めてきた。

昭和61年度には、県公営住宅尼崎立花第1団地他の改築計画が立案され、その事前調査と設計事務が始まっている。

一方、上ノ島遺跡の所在する尼崎市上ノ島の市街地周辺は、昭和34年の遺跡確認以来4次の調査が実施され、市立立花中学校グランドを中心に東西約150m、南北約150mの範囲が遺跡と推定されていた。

最近の尼崎市教育委員会による下水道等の市街地再開発に伴う事前発掘調査では、中学校北門付近で遺物包含層を確認したり、遺跡推定範囲の西北部で土壤を検出している。

昭和62年5月、都市住宅部から兵庫県教育委員会に建設工事の通知がされた。そこで、県教育委員会は事前の遺跡確認調査が必要である旨、都市住宅部に回答した。

この後、県教育委員会社会教育文化財課と都市住宅部住宅建設課は具体的な協議に入り、昭和62年12月に遺跡の範囲を把握するための、確認調査（試掘場4ヶ所）を実施したのである。その結果、弥生時代前期の溝をはじめ弥生時代から中世の遺物包含層を検出した。この成果にもとづき、事業区域内の埋蔵文化財の取扱いについて、再度住宅建設課と協議を重ねた。そして、計画地内全域に全面調査の必要があるという結論に至ったのである。



第1図 トレンチ作業風景

第2節 調査概要とその組織体制

1. 確認調査

確認調査は、昭和62年12月初めに実施した。調査の目的は、建物建設事業用地内の遺構および性格、さらにその範囲と年代を確認することにある。

試掘壕は建物建設予定範囲に合わせ、縦横に4ヶ所を設定した（第3図）。南のトレンチ（25m×2m）から開始し、西（42m×2m）・北（28m×2m）・中（25m×2m）のトレンチと試掘していった。その結果、南トレンチでは弥生時代の溝を検出した。その上層には古墳時代から平安時代の遺物包含層、さらに上層には中世の水田跡と、近世の水田跡の遺構面を確認した。西トレンチには弥生時代の溝の続きを発見した。また、北トレンチでは平安時代末期の溝と考えられる落ち込みを発見し、上層には一部に古墳時代から中世の遺物包含層が拡がることも明らかになった。さらに、上層では南トレンチと異なり近世の畑の畝が確認された。

発掘調査の組織体制

調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課	長	北村 幸久
		参	事	森崎 理一
		課長補佐兼		
		埋蔵文化財調査係長	大村 敬通	
		主	査	井守 徳男
調査担当	主	任	大平 茂	
	技術職員	藤田 淳		

調査実施期日

（自）昭和62年12月1日～（至）昭和62年12月8日

2. 全面調査

前記した確認調査の結果を受けて、昭和63年1月から南と北に並んで建設される建物用地にあたる部分の全面調査に入った。調査は、南区・北区と呼称している。南区は東西約27m・南北約13.5m、北区は東西約27m・南北約13.5mの東西に長い長方形調査区である。

調査実施の目的は、この部分の遺構の拡がり（範囲）及び性格、さらに正確な年代を確認することにある。特に、南区の弥生時代前期遺構、中世・近世の水田、北区の平安時代末期の溝遺構と近世の畑作遺構の内容実態を把握することが重要な視点である。

調査方法は、最初に現代の盛土整地層及び旧耕作土を重機によって除去し、その後人力によ

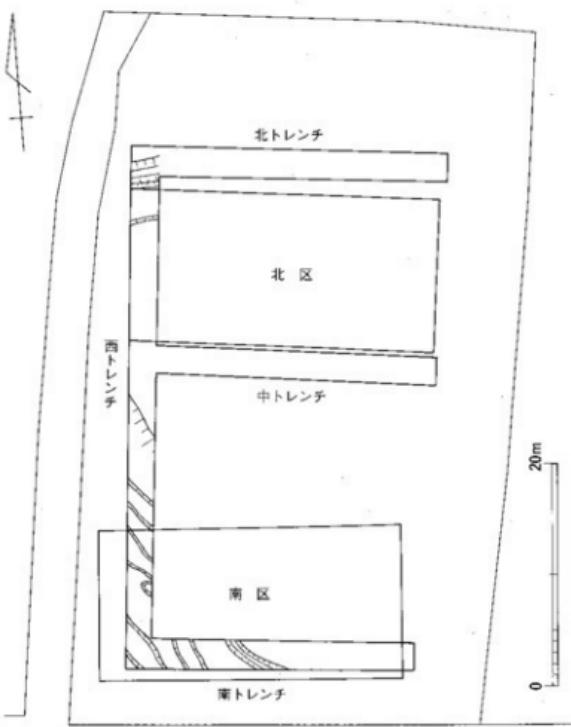


第2図 調査地位置図 (S=1/3000)

り掘削・精査を行った。また、写真撮影については枠組み足場によるもの他、クレーン車とリフトセンターを使用して行った。

北区の調査

現代の盛土整地層と旧耕作土を除去すると砂層となる。砂層は、均一な堆積状況を示し、河川の洪水によって一時に堆積したと考えられた。砂層に覆われた下層には畝状造構が検出された。畝状造構は烟の痕跡と認められ、この砂層から出土した染付磁器によりそれを上限とする年代が与えられる。なお、後世に擾乱された部分も多い。



第3図 確認トレンチ及び全調査区設定図

この試状遺構の耕作土より下層は、確認調査の成果から北半部のみを掘り下げた。下層は中世から古墳時代の遺物包含層でその下が青灰色シルト層の基盤層となる。この土層は水田土壤と思われるが、畦等の遺構は発見出来なかった。基盤層上面での遺構は、調査区北西隅で平安時代末期の溝と土塙を検出した。また遺物は、古墳時代から鎌倉時代にかけての須恵器・土師器・中世土器等があり、注目すべきものに調査区東寄りの基盤層直上で発見した石製の巡方がある。

南区の調査

北区と同様に砂層から開始した。砂層を取り除くと近世の水田層である。下層には中世の水田層がある。この下層は、古墳時代から平安時代の遺物包含層である。次いで、弥生時代の遺物包含層があり、弥生時代前期の溝を検出した。この遺構は基盤層と考える青灰色シルト層を切り込んでいる。なお、この溝の西端には同時期の微高地が認められた。遺物は、溝及び包含層出土の弥生時代前期の土器と石器及び若干の木器がある。最後に、弥生時代前期の溝の一部と近世畠の断面土層剥ぎ取りを行った。なお、1月27日には現地説明会も実施している。

発掘調査の組織体制

調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

調査体制 事務担当 課長 北村 幸久
参事 森崎 理一
課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長 大村 敬通
主査 非守 徳男
調査担当 主任 大平 茂
技術職員 市橋 重喜

発掘作業委託 (株) 宗像建設

調査実施期日

(自)昭和63年1月6日 ~ (至)昭和63年1月30日

3. 整理調査

都市住宅部から委託を受けた兵庫県教育委員会は、発掘調査の成果を社会教育資料として活用するために、昭和63年度・平成元年度・平成2年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において整理作業を実施した。

整理作業の内容は、1. 水洗 2. ネーミング 3. 接合・復元 4. 実測・拓本 5. 写真撮影 6. トレース 7. 原稿執筆 8. レイアウト 9. 印刷 10. 報告書刊行となる。

出土遺物は、整理用コンテナ41箱であり、弥生時代の溝及び遺物包含層から発見した弥生時

代土器・石器がその大半を占める。他には土師器・須恵器・中世土器と若干の近世土器と木器がある。土層剥ぎ取り資料も、併せて処理している。これについては、新設される尼崎市立歴史資料館に展示する予定である。

整理調査の組織体制（平成3年度のみ）

調査主体 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査体制 事務担当 所長 内田 隆義

副所長 駒井 功

副所長 才木 繁

整理普及課長 松下 勝

課長補佐 小川 良太

主任 山下 史朗

調査担当 主査 大平 茂

技術職員 藤田 淳

嘱託職員 長浜 幸子、吉井 京子

同 上 吉田 由起子

なお、本報告書作成中の1990年5月3日技術職員の市橋重喜が急逝し、担当者一同大変な衝撃を受けた。33歳の若さであり、当県の文化財行政にとっては必要欠くべからざる存在であつただけに、その損失は計り知れないものがある。特に、本遺跡の調査では遺跡の性格解明に自然科学分野の援助を受けようとして、多くのサンプルを採集していたこと挙げられる。これを生かせなかったことをお詫びするとともに、ここに記して深く哀悼の意を表します。



第4図 断面土層剥ぎ取り風景

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

ここ尼崎市は、兵庫県の東南端に位置し、JR三宮駅から東へ約20kmにある。東は大阪府と隣接し、市域は東西約8km南北約11kmとやや南北に長い。面積は約49km²、人口498,020人の阪神工業地帯の中核をなす都市である。交通関係では、南から阪神高速道路・阪神電鉄神戸大阪線・国道2号線・JR東海道線・名神高速道路・阪急電鉄神戸線が東西に走る。気象状況は、瀬戸内性に属し年間平均気温15.6°C、年間平均降水量1,315.5mm、年間平均降水日数109.1日と温和な気候である。

市内の地形は、北辺が伊丹段丘（低位段丘）の南端部にあたり、ここから南に向かってしだいに低くなり、猪名川と武庫川のつくりだした氾濫原・三角洲が大阪湾に臨む。

武庫川は、丹波篠山盆地南の山中に源を発し、三田盆地・武庫川峡谷をへて、大阪湾に注ぐ延長65kmの2級河川である。下流域は、弥生時代には現庄下川付近を流れていたと言われる。

上ノ島遺跡は武庫川流域に属し、兵庫県尼崎市上ノ島字野上に所在する。阪急電鉄神戸線武庫之荘駅の南東約0.8kmに位置し、現武庫川から東へ約2kmにある。標高は現地表面で4.2m(T.P)を測る。

遺跡周辺地は、縄文海進以降徐々に海平面が低くなり、さらに武庫川の堆積作用より沖積地となったのである。上ノ島遺跡は、弥生時代の推定海岸線に極めて近い距離、そして奈良・平安時代の推定海岸線から約3kmの距離にある。ここから南は中世以降、人間の手により干拓・埋め立てられたものであろう。現在の海岸線は南約4kmの距離である。

武庫川は、近世でも上ノ島遺跡の水田上の洪水砂を見れば暴れ川だったことが理解できる。

第2節 歴史的環境

尼崎市内の遺跡は、主に武庫川流域（庄下川を含む）と猪名川流域（藻川を含む）に存在している。

武庫川下流域の遺跡

地理的環境で述べたように、市内はほとんどが沖積地である。このため遺跡は、主に低地の自然堤防上・三角洲に立地し、縄文時代から歴史時代にわたっている。ここでは、市内武庫川下流域にあたる各時代の遺跡について概観してみよう。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡（遺物）の発見はない。地理的条件から考えて、今後も確認される可能性は非常に少ない。

2. 繩文時代

人間の生活痕跡（遺構・遺物）は、晩期になって初めて確認される。上ノ島遺跡（1）の土器である。但し、弥生時代の土器と併出で、遺構は発見されていない。

このように遺跡数・遺物量とも非常に少ない地域である。しかし、今後、台地部（低位段丘上）の再開発には注意しなければならないであろう。

3. 弥生時代

弥生時代の遺跡は、前期に自然堤防上、中期から後期には台地部・自然堤防上に立地している。

前期では、上ノ島遺跡、東武庫遺跡（2）、栗山・庄下川遺跡（3）、北裏遺跡（4）がある。但し、上ノ島を除いていずれも小規模のものであり、住居跡は発見されていない。

中期になると、前期から続く北裏遺跡に方形周溝遺構と土塙があり、台地上の武庫庄遺跡（5）にも墓になるであろう方形周溝遺構と竪穴住居跡が検出されている。さらに、西隣にある西宮市津門銅鐸（扁平紐式）も注目される。

後期では、上記北裏遺跡に竪穴住居跡がある程度で、他に目立つものはない。

この他、南城越（6）・道ノ下（7）・南戸板（8）・東柿ノ木（9）・庄ノ内（10）・四方田（11）の遺跡が存在するが、散布地であり詳細は不明である。

このように、縄文時代晩期に北九州に入ってきた水稻耕作は、武庫川を通り各所に集落を構え、低地の水田開発を行ってきたのである。しかし、遺跡は他地域のように前期から中期と継続するものが少なく、中期から後期に数が増大する訳でもない。多分に、武庫川の流路・水量不安定さが影響しているのであろう。

4. 古墳時代

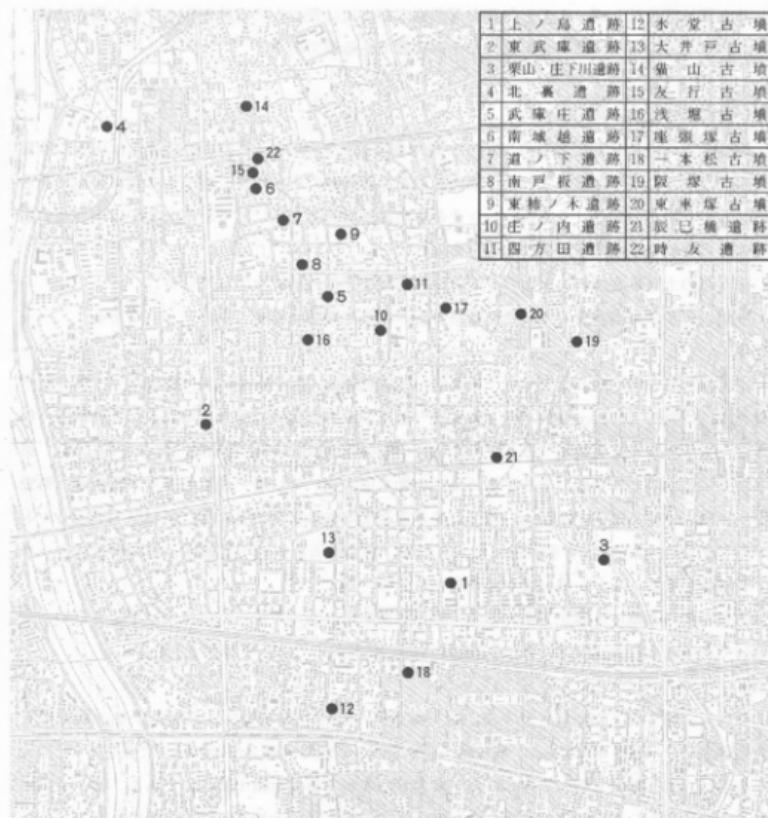
古墳は、大正時代以降の開発で多くのものが破壊され、4世紀後半の水堂古墳（12、全長60m・前方後円墳）と大井戸古墳（13、全長45m・前方後円墳）が残っているにすぎない。大井戸古墳では須恵器が採集されている。なお、痕跡または伝承をもつものとして、猫山古墳（14）・行友古墳（15）・浅堀古墳（16）・座頭塚古墳（17）・一本松古墳（18）・阪塚古墳（19）・東車塚古墳（20）がある。

このように古墳は、尼崎市内では前期の後半から築造が開始され、竪穴式石室・粘土櫛を経て後期の横穴式石室へ繋がっていくのである。古墳に比べ、集落址については猪名川流域で幾つかの遺跡（下坂部・若王寺）が見つかっているものの、武庫川流域では未だ不明な点が多く今後この調査が課題として残る。

5. 歴史時代

歴史時代は武庫郡に属し、遺跡としては、栗山・庄下川遺跡、東武庫遺跡、辰巳橋遺跡(21)・時友遺跡(22)が知られる。辰巳橋遺跡では、奈良時代末の軒瓦が出土し、寺院もしくは役所関係の建物址が推定される。また、宋代の舶載磁器もある。

奈良・平安時代では、このように役所もしくは莊園関係と仏教流布の遺跡を見る事ができる。さらに、注目すべきは武庫川河口付近が、武庫の津・武庫の泊と呼ばれ、海上交通の中心地であったことである。



第5図 上ノ島周辺の遺跡分布地図 (S=1/30000)

第3章 調査の記録

第1節 遺跡の立地と基本堆積土層

1. 遺跡の立地

地形分析から見れば、当該地区は旧武庫川が形成した居住域及び墓域に利用されたであろう三角洲と、水田としての利用が考えられる氾濫原から成りたっていることが理解出来る。

また微地形を見れば、この三角洲と氾濫原のなかには幾つかの流路が存在する。調査地は、この南東に延びる三角洲の北東端にかかる位置である訳である。

2. 基本堆積土層と検出遺構

調査地点の立地は前記の通りであり、現地表下約1.5m～3mには青灰色または灰色の砂質シルトが交互に厚く堆積しており、調査地周辺は湿地状であったか、緩やかな流れの中にあったことがうかがわれる。また西トレンドの弥生以前の河道を境にして、南と北では中世頃の削平のためか若干土層堆積が異なるのである。

第6図の土層断面図は、上記のシルト層が堆積終了後の状況を示している。

確認調査及び全面調査の土層断面観察からみた基本堆積土層は、次のごとくである。

南区

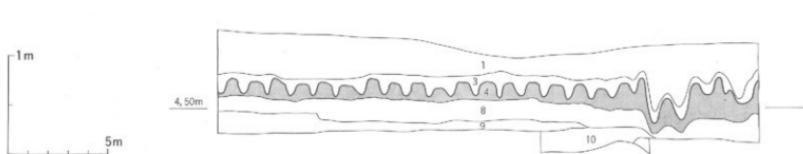
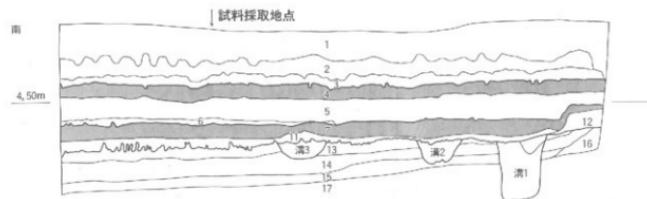
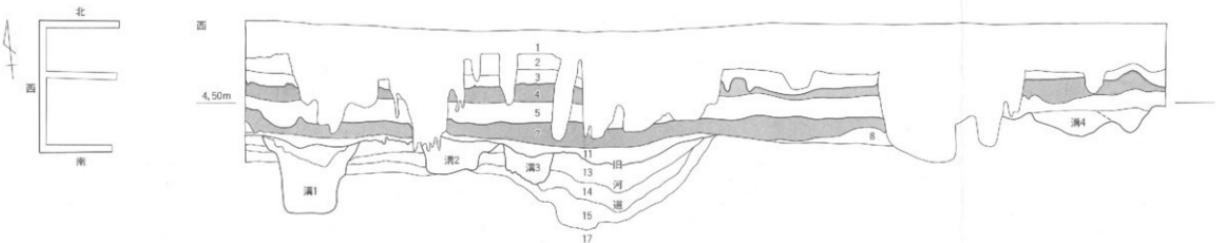
南区は、第1層—盛り土整地層、第2層—黒灰色細砂（厚さ平均15cm）旧耕作土、第3層—黄色細砂（厚さ平均10cm）洪水砂、第4層—灰色シルト質粗砂（厚さ平均15cm）近世水田、第5層—青灰色シルト質粗砂（厚さ平均25cm）、第6層—褐色シルト質粗砂（厚さ平均10cm）、第7層—灰色シルト質粗砂（厚さ平均15cm）中世水田、次いで11層—淡黒色シルト質粗砂、第12層—黒褐色中砂（厚さ平均20cm）西部にのみ遺存する弥生前期の包含層、第13層—黒色シルト（厚さ平均10cm）、第14層青灰色シルト質細砂、第15層灰色シルト質細砂、第17層青灰色シルト質細砂となる。なお、第14層を基盤層と考えている。

弥生時代の遺構は、溝が3条である。第13層面を切り込んで造られ、埋土は黒灰色シルト質粗砂である。また第13層は、水田土壤層の可能性がある。

北区

北区は、第4層下が南区と異なる。以下第8層—灰色中砂（厚さ平均20cm）、第9層—褐灰色砂礫混じり（厚さ平均15cm）、第10層—褐色シルト質粗砂（厚さ平均20cm）である。

遺構は、第9層面を切って造られた平安末期の溝が1条と土壙1基のみである。第9・10層は、古墳時代から平安時代の遺物を含む層であり、第8層は中世水田層の可能性もある。



- 1. 褐土（整地層）
- 2. 黒灰色細砂（日耕作土）
- 3. 黄色細砂（洪水沙）
- 4. 淡褐色シルト質中一粗砂（近世水田）
- 5. 青灰色シルト質中一粗砂
- 6. 橙褐色シルト質中一粗砂
- 7. 淡褐色シルト質中一粗砂（中世水田）
- 8. 黄色粗砂
- 9. 橙褐色砂礫混り
- 10. 橙褐色シルト質中一粗砂
- 11. 淡褐色シルト質中一粗砂（弥生～平安）
- 12. 黑灰色細一中砂（弥生前層）
- 13. 黑色シルト
- 14. 青灰色シルト質細砂
- 15. 淡褐色シルト質細砂
- 16. 黑色粗砂
- 17. 青灰色シルト質細砂

第6図 滞跡土層断面図

第2節 検出遺構と遺物出土状況

1. 弥生時代前期（第7図・図版一下）

この時期の遺構は、南調査区のみに存在し、北区側には一切見られない。遺構面は調査区南西端に微高地があり、東へ徐々に低くなる。また、北側にも地形の落ちが確認でき、北東には、遺構は拡がらないと考える。検出した遺構は、北西から南東に流れる溝が3条である。

◎南区 溝遺構

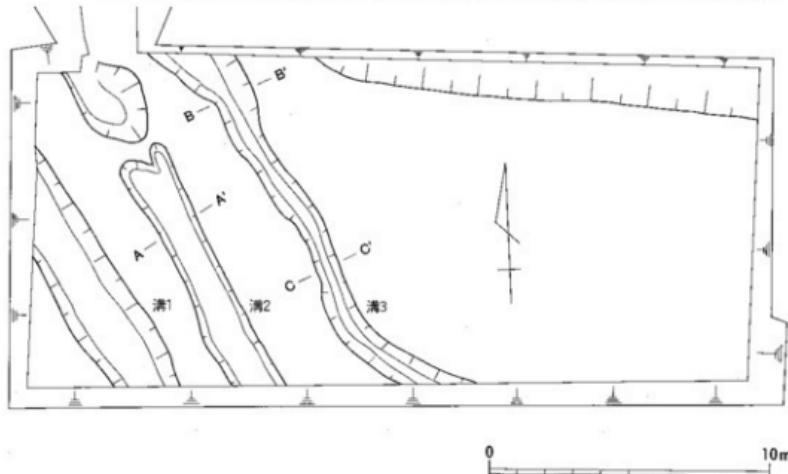
溝1（第7図・図版三上）

調査区南西端の微高地直下の低湿地部を、北西から南東へ直線的に走る溝である。規模は幅約2.50m、深さ60~70cm、長さ10m以上を測る。溝の断面形態は幅広いU字形で、溝肩の標高は4.15mである。溝内の埋土は大きく2層に分けることができ、上層は黒灰色シルト質細砂であり、下層は黒灰色シルトである。

遺物は、上下層とも弥生時代前期の土器・石器があり、下層には木器も発見した。

溝2（第7・8図・図版二上）

溝1の東約2mを併走する溝である。一部途切れる箇所があるが、これは調査（検出面の深さ）のミスで本来は連続しているものである。規模は幅約1.50m、深さ20~30cm、長さ13m以上を測る。溝の断面形態は上端が広がるU字形で、溝肩の標高は4.10mである。溝の埋土は第



第7図 南区 弥生時代前期遺構配置図

8図の通りである。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器がある。

溝3(第7・8図)

溝2の東約2mに位置する。北西から南東に流れ、調査区南端で少し東に流路を変える。

規模は幅約0.8~2.0m、深さ15~30cm、長さ20m以上を測る。

溝の断面形態はU字形で、溝肩は標高

4.10mである。溝の埋土は黒灰色を呈する。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器が出土している。

2. 平安時代後期(第9図・図版四上)

この時期の遺構は、北区に溝1条と土塙1基がある。この面は北西から南東に緩やかに傾斜していることから北西方向の調査区域外に居住区となる微高地が存在するのであろう。

なお、南区にも平安時代の土器は出土しているが、中世と考える水田層中からであり、当該時期の遺構があった場合には、この水田造成により破壊されたと理解する。

◎北区 溝・土塙

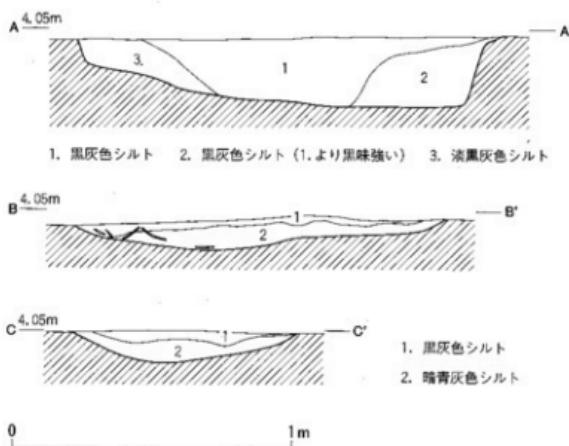
溝4(第9・10図・図版四下)

調査区北西部に位置し、西から東へ流れる溝である。全面調査時では、調査範囲の関係で南岸部しか検出できなかった。

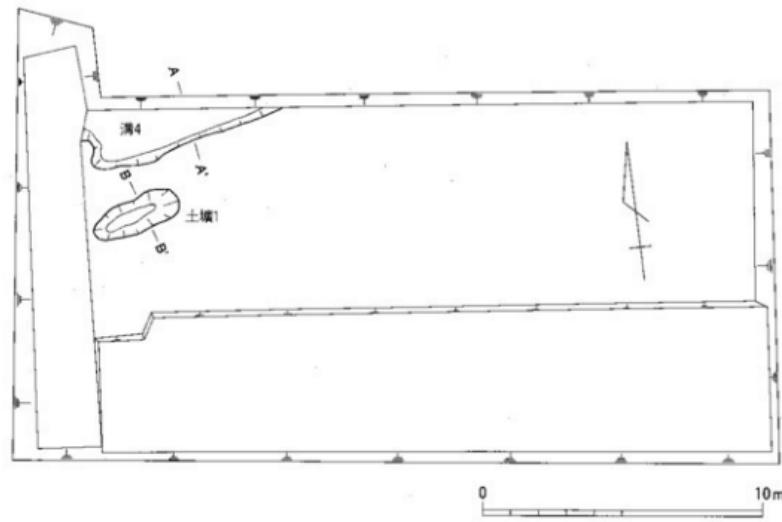
規模は、確認西トレーニング調査時に幅約4.0m、深さ約40cmを測り、北には切り合い関係にある別の溝が存在する。

溝の断面は逆蕭鉢形を呈し、埋土は第10図の通りである。溝肩は標高4.40mを測る。

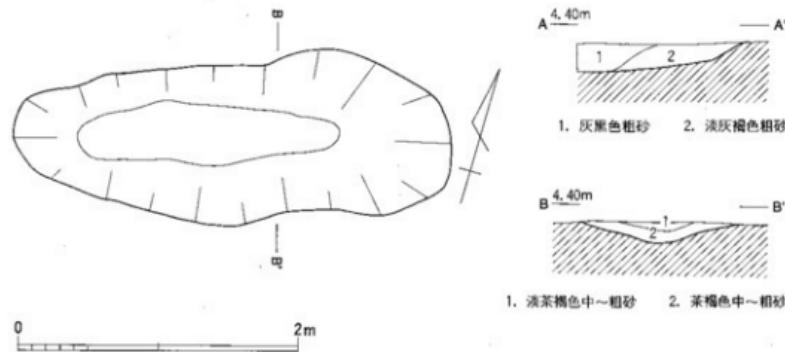
出土遺物は、弥生土器(前期)、黑色土器、瓦器及び木片がある。



第8図 南区 溝2・3土層断面図



第9図 北区 平安時代後期遺構配置図



第10図 北区 溝4・土壤1平面図、断面図

土壤1（第9・10図・図版五上）

溝4の南約1mに位置する土壤である。

平面は長楕円形を呈し、長径3.15m、短径1.10m、深さ15cmを測る。

断面はレンズ状を呈し、埋土は上層が淡茶褐色、下層が茶褐色である。

遺物は、土師器を少し検出したが、固化できるものではない。

3. 鎌倉時代

この時期の遺構は、南区の水田面である。詳細な時期決定は出来ないが、上層が中世の遺物を若干含む包含層であり、水田層中に10~11世紀代の土器を含むことから、これを水田造成時の混入と捉えそれを遡る時期ではないと判断する。

なお、北区にもこの時期の水田土壤ではないかと考える層もあったが、確認調査時に確実な畦畔を検出できなかったため、平面的な調査は実施しなかった。

◎南区

水田遺構

まず、畦畔について記すと、調査区内では大畦畔は認められなかつたが、南西端に北西から南東に延びる段状の落ちを検出した。これは、田を区画する小畦畔にあたるものであり、おそらく大畦畔もこの方向にのった規格と推定する。なお、調査面積が少なく、残念ながら一筆ごとの面積は明らかにできなかつた。

標高は、南西端の水田段上のものが4.45m、次いで段下の水田が4.30mである。

水田土壤は、暗灰褐色シルト質土からなり、約15cmの厚みがある。

検出した遺構は以上のとおりであり、水田層中から出土した遺物には、須恵器がある。

4. 江戸時代

当時期の遺構には、南区の水田面と北区の畑（畝状遺構）がある。どちらも、第3層—黄色細砂（洪水砂）の下層に検出したもので、水田層中に遺物は認められず、洪水砂内の遺物から時期を決定している。

◎南区

水田遺構（図版三下）

畦畔は認められず、水田…筆の広さは調査面積を上回ることが推測される。

水田土壤は灰色シルト質粗砂からなり、厚さ約15cmを測る。水田上面には多数の人間の足跡が確認できた。標高は4.70m。

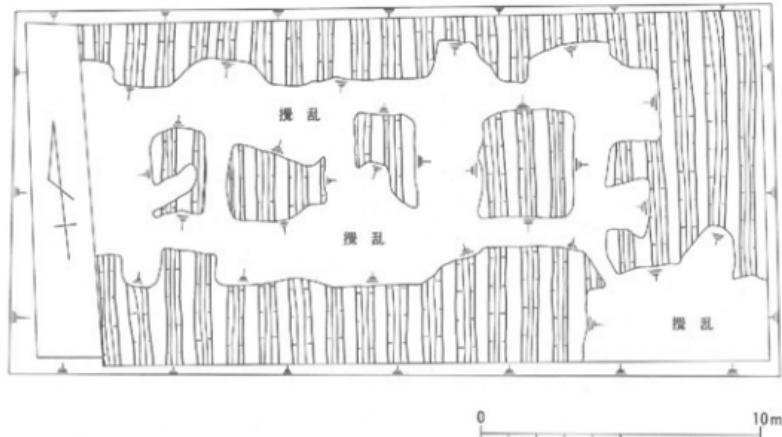
◎北区

畠遺構（第11図・図版六上）

畝状遺構が発見されたものの、南区同様に畦畔は認められず一筆の面積は明らかでない。土壤は灰色シルト質粗砂からなり、畝幅は約1.20m、高さ約15cmである。畝の上面及び畝間には

足跡を多数確認している。

両地区に認められた黄色砂は同一の洪水と考えられることから、この遺構は同時に存在していたと判断できる。そのため、この地区間の未調査部分に畝状遺構と直交方向の畦畔があると推定される。



第11図 北区 江戸時代窯遺構平面図



第12図 現地説明会風景



第13図 発掘作業風景

第4章 出土遺物

今回の調査では、弥生時代前期の溝から出土した弥生土器、石器、木器、包含層から検出した弥生土器、石器、土師器、須恵器、瓦器及び黒色土器に若干の近世陶磁器等の遺物があり、整理用コンテナにして41箱である。

ここでは、土器・石器・木器・その他に分け、土器については遺構及び包含層ごとに記述し、井藤暁子「入門講座弥生土器—近畿1—」『考古学ジャーナル』195に準拠する。

第1節 土 器

1. 溝1出土の土器

弥生土器 (第14図1-14)

器種は壺、甕、蓋がある。

広口壺 (1) は、斜め上方に聞く口縁部のみで、口縁端部に一条の沈線を巡らす。復元口径15.4cm。(2, 3) は同一個体と考えられ、張りのある胴部から内傾する体部上半である。本来、段があるべき粘土紐接合位置の胴部と頸部に、沈線を持つ削出突帯を巡らし、頸部の突帯には刻目を施す。調整は外面が横方向のヘラミガキ、内面はナデを施す。

甕 (7) は、倒鐘形の体部に、屈曲して斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ。丸い罐部には刻目を加え、頸部下には2条のヘラ描沈線文を施す。調整は内外面ともナデ。口径23.0cm、器高23.0cmを測る。(5) は、体部からなめらかに外反する口縁部。罐部に面を持ち、小さな刻み目を端部下端に加える。頸部には3条のヘラ描沈線文を施す。口径20.0cm。(6) は、やや丸味を持つ体部からなめらかに屈曲する口縁部。丸い罐部には刻み目を加える。口径20.0cm。

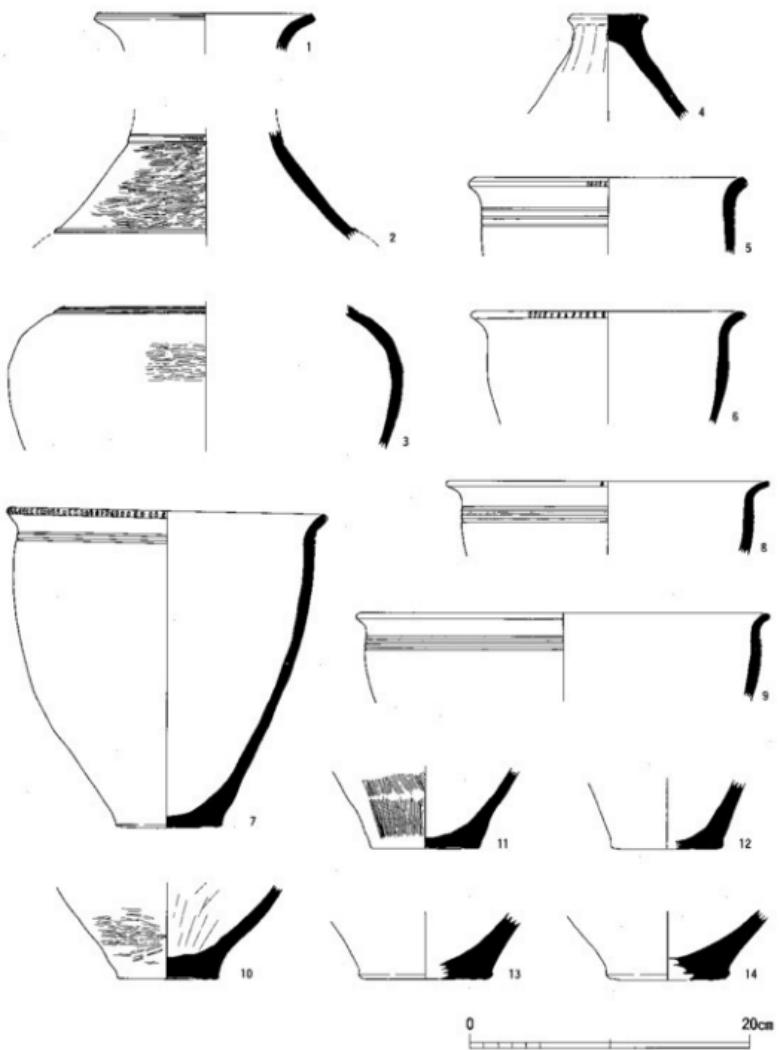
(8) は、体部からなめらかに外反する口縁部。罐部には刻み目を加え、体部には3条のヘラ描沈線文を施す。口径23.0cm。(9) は、やや丸味を持つ体部からなめらかに外反する口縁部。罐部は丸く、体部には3条のヘラ描沈線文を施す。鉢の可能性もある。口径30.0cm。

甕蓋 (4) は、わずかに凹む把手部から外彎しながら斜め下方に掠がる笠形の体部。外面の調整はハケである。

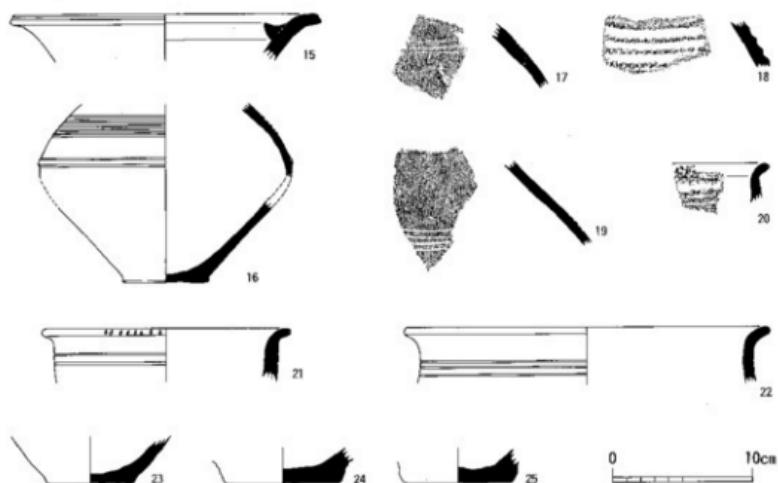
底部 (11, 12) は、甕底部の破片である。(11) の体部外面はハケ、内面はナデ調整を施す。底径6.8cmを測る。

底部 (10, 13, 14) は、甕底部の破片である。いづれも底は高く作り出す。(10) の体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。底径7.4cmを測る。

以上、この遺構出土の土器は甕の削出突帯第II種少条と甕のヘラ描沈線の条数から、井藤編年前期I-b~c段階に比定できよう。



第14図 南区 溝1 出土土器



第15図 南区 溝2出土土器

2. 溝2出土の土器

弥生土器（第15図15～25）

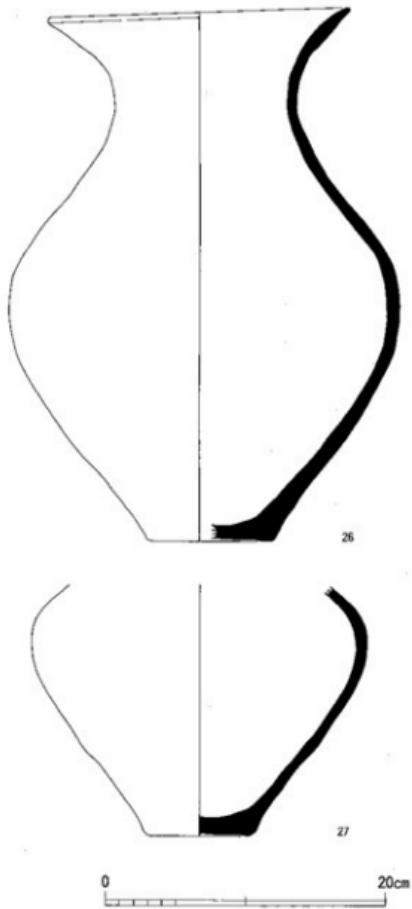
器種は壺、甕がある。

広口壺（15）は、外反する口縁部。口縁端部に一条の沈線を巡らし、内面には貼付突帯を用いる。調整は外面がヘラミガキ、内面はナデである。口径22.4cmを測る。（16）はほぼ中位に最大径をもつ体部。最大径の部分に貼付突帯、その上部にヘラ描沈線文多条を施す。外面がヘラミガキ、内面はナデ調整である。（17・18・19）は肩部上半部。（17・19）はヘラ描沈線文を施し、（18）は貼付突帯を用いる。

甕（20・21・22）は体部からなめらかに外反する口縁部。（20・21）は端部に刻目を加え、頸部にヘラ描沈線文を施す。内外面ともナデ調整。口径18.0cm。（22）の文様は口縁端部に刻目を持たず、頸部のヘラ描沈線文のみである。剥離と磨滅のため調整は不明である。口径26.4cmを測る。

底部（23・24・25）、（23）は壺底部の破片である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。底径4.5cm。（24・25）の調整は、磨滅のため不明である。

この遺構出土の土器は、壺貼付突帯と甕ヘラ描沈線の条数から、井藤編年前期II-a段階に比定できよう。



第16図 南区 溝3出土土器(1)

ヘラ描沈線文を巡らす。外面はハケ調整。(43.44)は口縁端部に刻目を施す。

鉢(46)は口縁部が直口のものである。口径16.0cm、器高12.0cmを測る。

底部(47.48.51.52)は壺の底部である。(51.52)の外面はハケ調整を施す。(49.50)は甕の底部である。

3. 溝3出土の土器

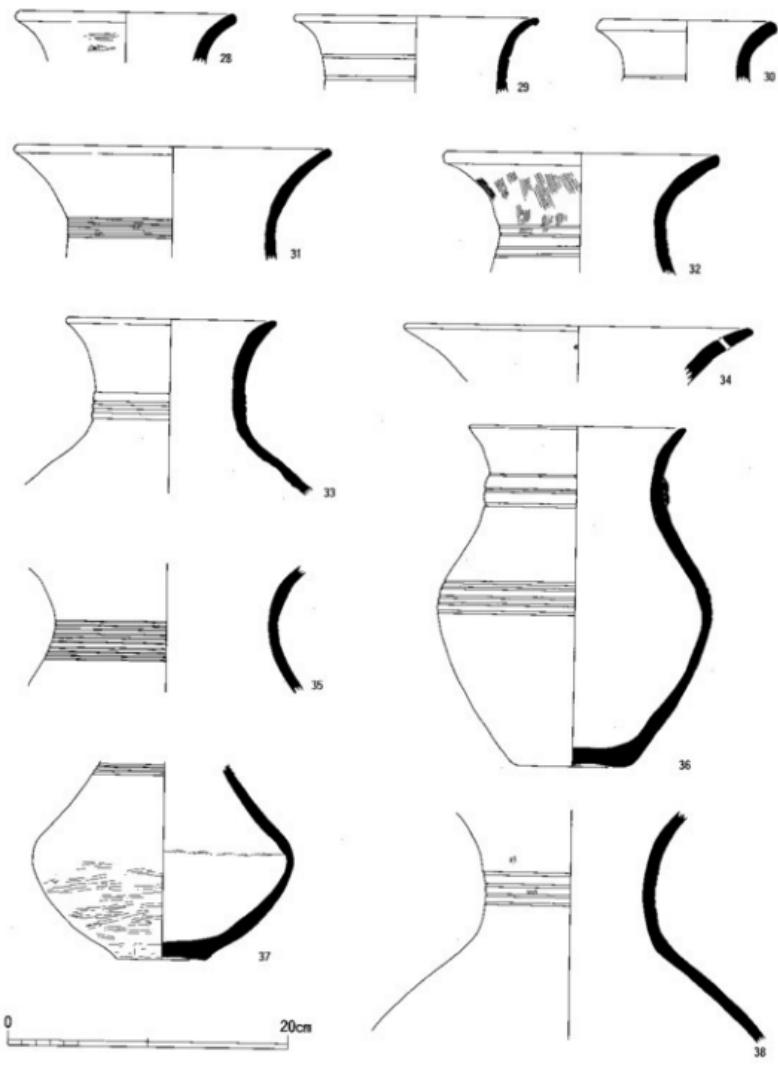
弥生土器(第16・17・18図26~52)

器種は壺、蓋、甕、鉢がある。

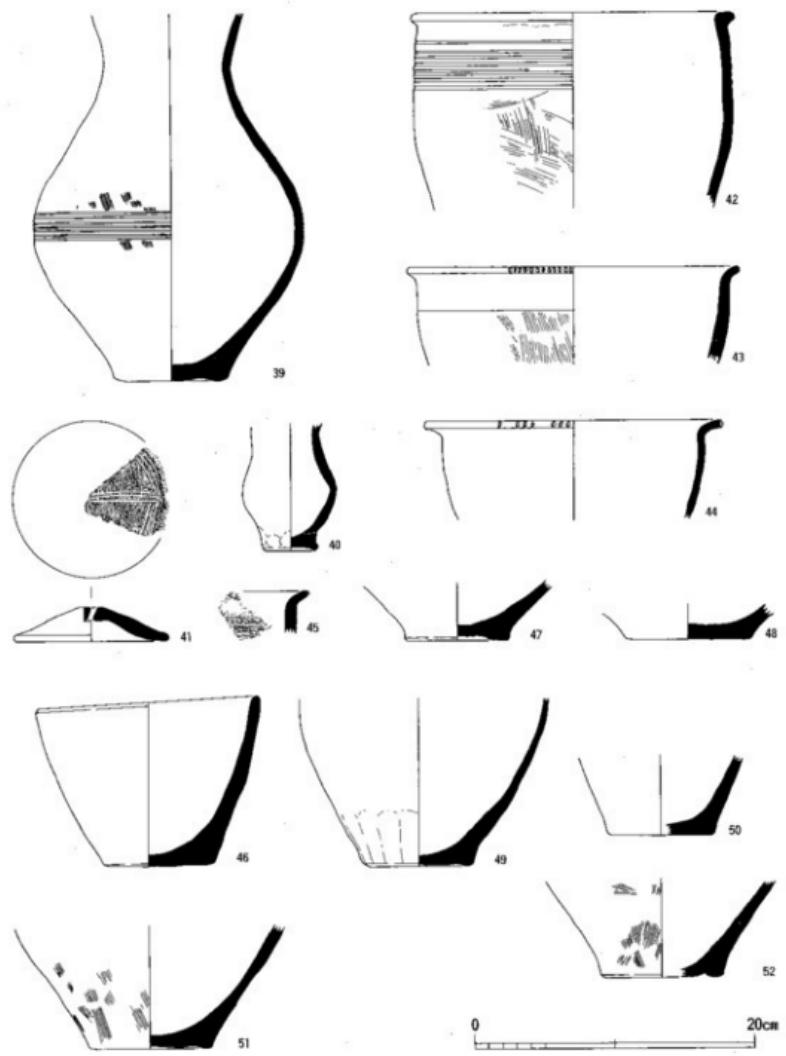
壺(26)は口縁部にわずかに段状の痕跡をのこす、無文のものである。外面はヘラミガキ、内面ナデ調整を施す。口径21.6cm、器高38.2cmを測る。(27)上半に張りを持つ体部。外面はヘラミガキ調整。(28)斜上方に外反しながら短く立上がる口縁部。端部は丸い。(29.30)は頸部にヘラ描沈線文を持つ。(31)はなめらかに斜上方に大きく開く口縁部。頸部に、5条の沈線文を巡らす。口径22.8cm。(32)は頸部に4条の沈線文を巡らす。外面はハケ、内面はナデ調整を施す。(33)は頸部に削出突帯、(34)は小円孔を持つ。(35)は頸部に10条の沈線文を巡らす。(36)は頸部に貼付突帯、胴部に5条のヘラ描沈線文を持つ。(37)は上半に張りを持つ体部、頸部にヘラ描沈線文。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。胎土は牛駒西麓産である。(38)は頸部に4条の沈線文を巡らす。(39)は丈高的体部、胴部に7条の沈線文を持つ。(40)はミニチュアのものである。

壺蓋(41)は笠形のもので、中央部に小孔を穿ち、外面には3条のヘラ描沈線文で加飾する。

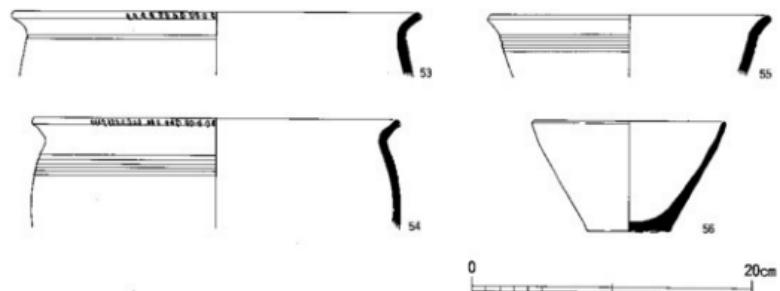
甕(42)は逆L字口縁で、体部に7条の



第17図 南区 溝3出土土器(2)



第18図 南区 溝3出土土器(3)



第19図 南区 微高地上包含層(第12層)出土土器

この造構出土の土器は、壺の削出突帯・貼付突帯と壺のヘラ描沈線の条数・逆L字口縁から、井藤編年前期I—c～II—a段階に比定でき、かなり時期幅が認められる。

4. 南区 微高地上包含層（第12層）出土土器

弥生土器（第19図53～56）

器種は壺、鉢がある。

壺（53）は、体部からなめらかに外反するいわゆる如意口の口縁部である。口縁端部には刻目を施し、体部に1条のヘラ描沈線を巡らす。口径29.6cm。（54）は体部から短く屈曲する口縁部。口縁端部に刻目を施し、体部に3条のヘラ描沈線を巡らす。口径26.6cm。（55）は体部からゆるやかに外反する口縁部。端部に刻目ではなく、体部に3条のヘラ描沈線が巡る。鉢になる可能性もある。口径20.4cm。

鉢（56）は、口縁部が直口するものである。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。口径13.8cm、器高8.0cmを測る。

この層は、図化できた土器の点数が少なく、器種が壺と鉢に限られるため、時期は特定しがたい。しいて言えば、井藤編年前期I—c～II—a段階に比定できようか。

5. 南区 包含層（第11層）出土土器

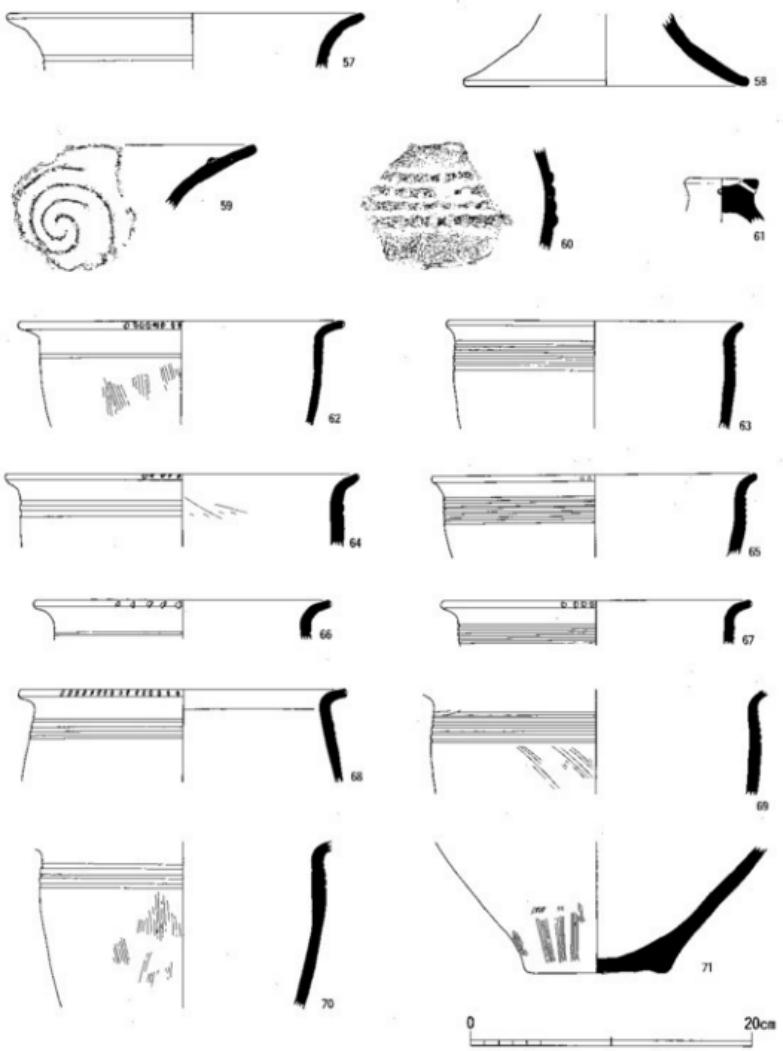
弥生土器（第20・21図76～95）

器種は壺、甕、壺、台付鉢がある。

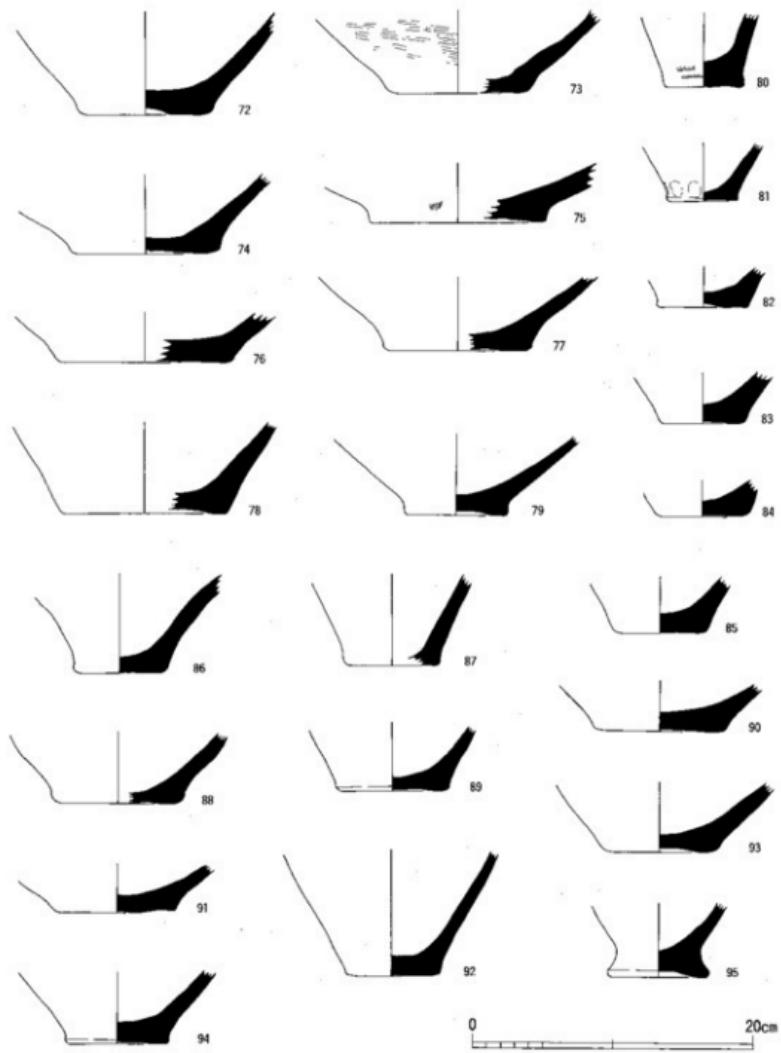
壺（57）は頸部が立上がり、上端で拡がる口縁部。頸部に1条のヘラ描沈線を巡らす。口径25.6cm。（59）は口縁内面に貼付突帯の渦巻文、（60）は胴部に刻目をもつ貼付突帯を配す。

甕蓋（58・61）は中央が窪み小円孔を有すつまみ部と、斜めにひらいた笠形の体部である。

甕（62～70）、外反する口縁端部に刻目を持ち、体部にヘラ描沈線を有するもの（62・64・



第20図 南区 包含層（第11層）出土土器（1）



第21図 南区 包含層（第11層）出土土器（2）

68少条) (65.67多条) と、口縁部に刻目がなく体部にヘラ描沈線を持つ(63)がある。(69.70)は体部外面にハケ調整を施す。

底部(71~79.83.86.88~91.93.94)は壺の底部破片である。

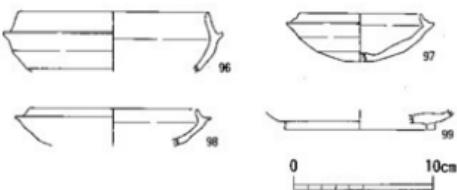
調整は磨滅が著しいため不明なものが多い。(80~82.84.87~89.92)は壺の底部である。(95)は台付鉢の脚台部である。

その他、図化できないが生駒西麓産胎土のものが十数点ある。

この層の弥生土器は、井藤編年前期I-c~II-a段階に比定できよう。

須恵器(第22図96~99)

壺(96)は受部が外上方に延びる。立ち上がりは内傾し、端面を丸くおさめる。口径13.8cmを測る。6世紀後半。(97.98)は立ち上がりが大きく内傾し、短い。(97)口径9.0cm。6世紀末~7世紀初。(99)は底に貼付の高台を持つものである。底径10.5cm。8世紀。



第22図 南区 包含層(第11層)出土土器(3)

5. 北区 包含層(第9・10層)出土土器

土師器(第23図100~103)

壺(100)は短く外反する口縁部に、さらに端部を外方に押さえ面を持たせる。口径19.2cm。

高壺(101~103)脚柱部。(101)は中空で、壺接合部から下方へ緩やかに開く。(102)は中実のもので、裾部から大きく開く。(103)は中空で、円柱状を呈す。いずれも磨滅が激しく、調整は不明である。弥生時代に属するものかも知れない。

須恵器(第23図104~115.117)

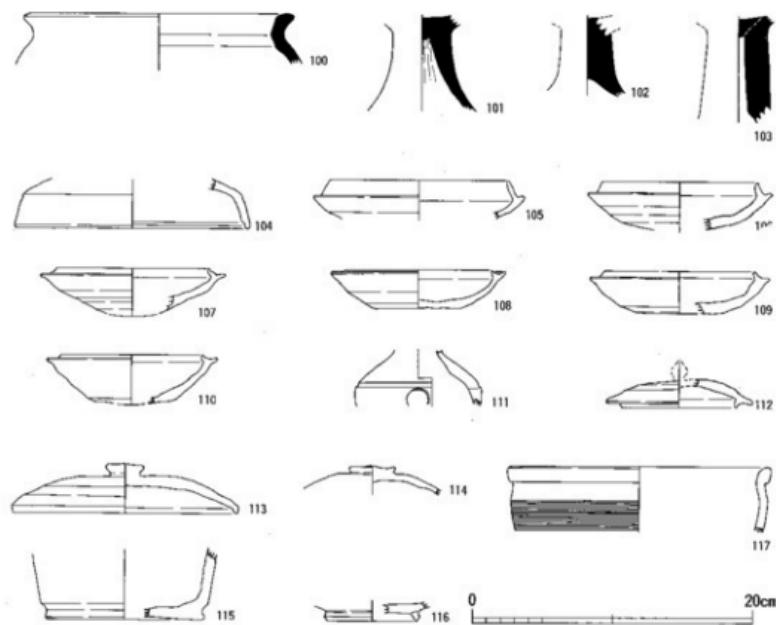
壺(104)は蓋で、天井部と口縁部の境にわずかに鈍い稜をのこし、口縁端部に段を持つ。6世紀前半。(105.106)は身で、立ち上がりが内傾し、端面を丸くおさめる。(106)口径11.2cm。6世紀末~7世紀初。(107.108.109.110)は立ち上がりが大きく内傾し、短い。

(108)口径10.6cmを測る。7世紀前半。(112)は蓋、天井中央部のつまみを欠く。口縁端部内面にかえりを持つ。かえりは口縁端部よりも下方に突出している。7世紀前半。(113.114)は蓋、天井中央部に偏平な宝珠形つまみを持つ。口縁端部は下方へ短く屈曲する。(113)口径16.2cmを測る。8世紀。

甕(111)は胴部の破片。肩と胴部の境にヘラ描の凹線が1条巡り、直下に円孔を持つ。6世紀後半。

壺(115)の底部である。10~11世紀。

鉢(117)は折り返し肥厚させる口縁を持つ。体部には横目を入れる。10~11世紀。



第23図 北区 包含層（第9・10層）出土土器

灰釉陶器（第23図116）

椀（116）の底部である。断面台形の貼付高台を持つ。9～10世紀。

6. 北区 溝4出土土器

弥生土器（第24図118）

底部（118）甕の底部である。前期のものか。

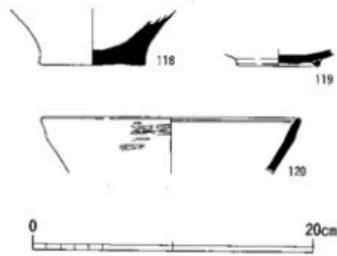
瓦器（第24図119）

瓦器（119）は椀である。底部に退化した断面
三角形の高台を持つ。13世紀。

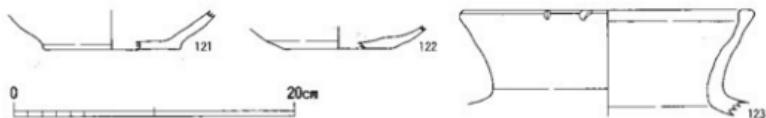
黒色土器（第24図120）

黒色土器（120）は口縁部が外反する椀である。

口縁端部内面に沈線を巡らす。11～12世紀。



第24図 北区 溝4出土土器



第25図 南区 鎌倉時代水田層（第7層）出土土器

7. 南区 鎌倉時代水田層（第7層）出土土器

須恵器（第25図121～123）

椀（121）は底部が糸切り底で平高台を持つ。（122）はヘラ切り底である。10～11世紀。

壺（123）は大きく上方に開く口縁部。口縁端部は肥厚させ面を持つ。また、口縁端部外面には、一部ヘラによる刻目がある。10～11世紀。

8. 北区 包含層（第8層）出土土器

土師器（第26図124～126）

把手（124）であるが、どの器種に付くものなのか明らかでない。

羽釜（125.126）は、短く直立した口縁部に断面四角形の鍔を持つ。

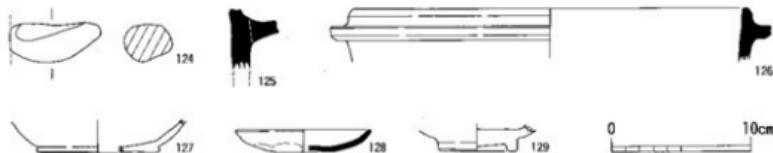
須恵器（第26図127）

椀（127）はヘラ切り底平高台である。9～10世紀。

瓦器・磁器（第26図128,129）

瓦器（128）は、外面底部に指押さえが認められる皿である。内面の暗文は、磨滅のため明らかでない。12世紀。

磁器（129）は青磁碗の高台部である。13世紀。

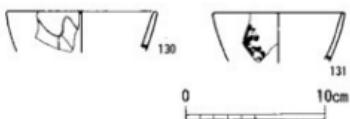


第26図 北区 包含層（第8層）出土土器

9. 北区 近世畠上層洪水砂出土土器

陶磁器（第27図130～131）

椀（130）は網手文様の染付。（131）は陶胎染付である。17～18世紀。

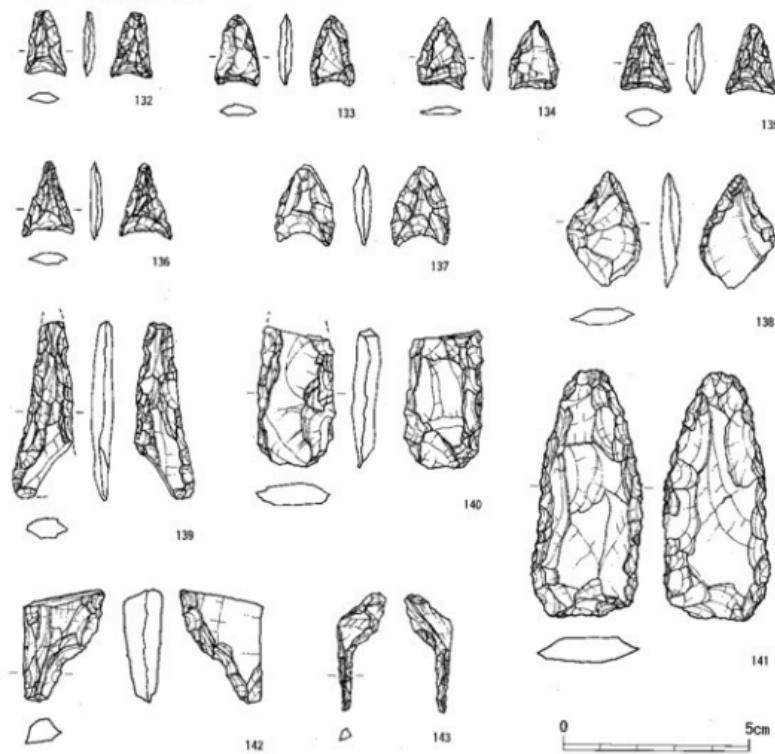


第27図 北区 江戸時代畠上層洪水砂出土土器

第2節 石 器

今回の調査では196点の石器が出土した。このうち、遺構に伴うものはほとんど無く、弥生時代前期の遺物包含層から出土したもののが約半数を占める。また、中世水田層など弥生時代以降の堆積土中から出土しているものも多いが、ここでは一括して扱うこととする。

器種ごとの出土点数を示したものが第1表である。打製石器では、二次加工ある剝片と楔形石器が13点、12点と最も多く、次いで、石鎌の9点がめだつ。石槍、石錐、石匙などは1~2点に過ぎない。磨製石器では、石包丁と太い型蛤刃石斧が6点、5点とやや多い傾向がある。この他扁平片刃石斧、磨石、叩き石、砥石などがみられるが、砥石には弥生時代以降のものも含まれる可能性がある。



第28図 石器 (1)

石材では、打製石器については、楔形石器の中に珪化木製のものが2点みうけられる以外、製品はすべてサヌカイト製である。しかし、製品となっていない剝片やチップ、石核の中には、チャート製のものが30点あり、中でも、赤チャート製の小型剝片、チップが多い。第36図は、サヌカイトとチャートの剝片、チップについて、剝片の剥離の軸には関係なく長幅の散布図を示したものである。チャート製のものは、長さ2.5cm、幅2cmを超えるものはほとんどみられず、極めて小型である。これらが石器の素材となるとは考えられず、何らかの製品の副産物として生じたと思われるが、今回の出土資料中には、チャート製の製品は存在しないため、それがいかなるものかは不明である。

磨製石器では、石材の鑑定を行っていないため、正確な石材名はわからないものが多い。石材は名器種ごとに異なり、多様な石材が使用されている。

なお実測図を掲載した石器については、一覧表にまとめておく（第1表）。

石鎌（第28図132～140）

132～137は無茎凹基式の小型の石鎌である。大きさは長さが2cm前後、幅が1.5cm前後にまとまる。平均重量は0.7gである。139・140は破損しているが大型の石鎌である。138は基部側に二次加工がみられず、未製品であろう。

石槍（第28図141）

長さ6.1cm、幅2.8cmあり、石鎌よりも一回り大きいことから石槍とした。二次加工は粗く、先端も銳利さに欠ける。

石錐（第28図142・143）

2点ともつまみ部を有する石錐であるが、錐部の径は142が0.7～0.9cm、143が0.25～0.35cmとなり、143の方がかなり細く銳利である。

石匙（第28図144）

縦型の石匙が1点出土している。横長の剝片を縦に置き、一端につまみ部を作出している。つまみ部、刃部とも二次加工はほぼ腹面側からのみ施されている。

二次加工ある剝片（第29図145～148）

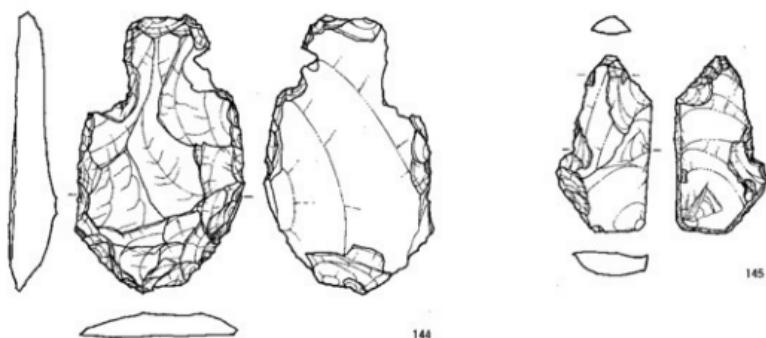
素材剝片の形を大きく変形すること無く、さまざまな二次加工を施したものを、二次加工ある剝片として一括したが、中には、平坦な二次加工が連続して施され、スクレイパーとして捉えられるものも存在する。13点を数えるが、代表的なものを4点図示した。

145は、縦長剝片の先端部の片側を中心に平坦な二次加工を施したものである。146は、幅広の剝片の末端から右側縁にかけて、腹面と背面の両方から平坦な二次加工を施したものである。

さらに、打面部もやや急角度の抉り入りの状の二次加工が腹面から施されている。

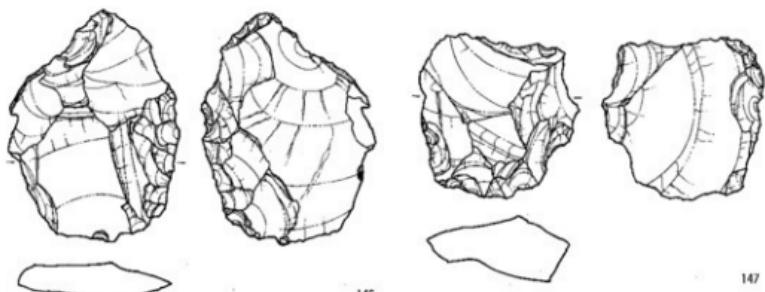
147は、幅広の剝片の周囲に急角度の抉り入り状の二次加工が施されたものである。

148は、幅広の剝片の一側縁に細かな二次加工が施されたものである。素材剝片の左半部は



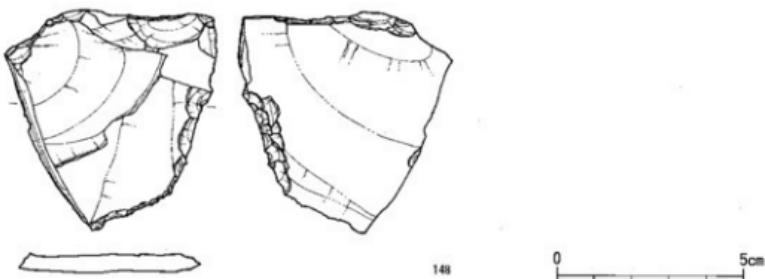
144

145



145

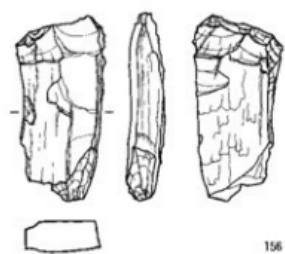
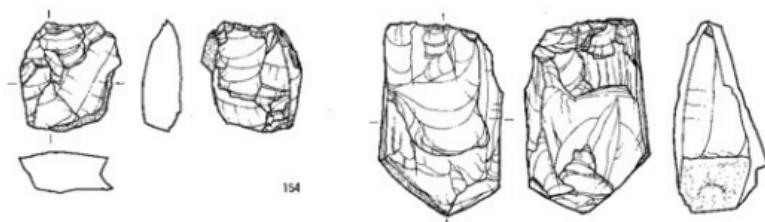
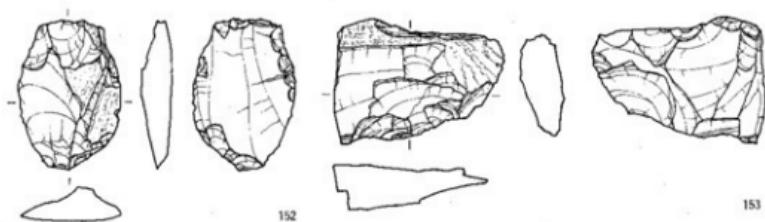
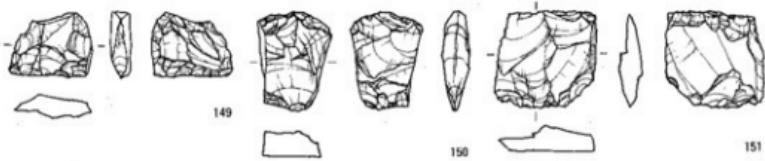
147



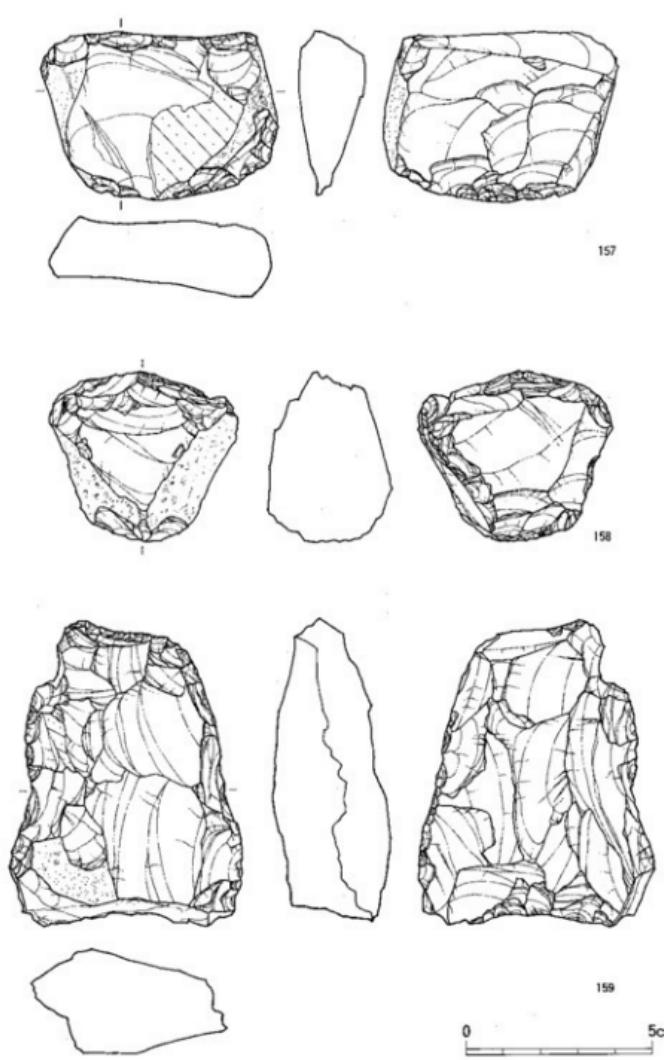
146

0 5cm

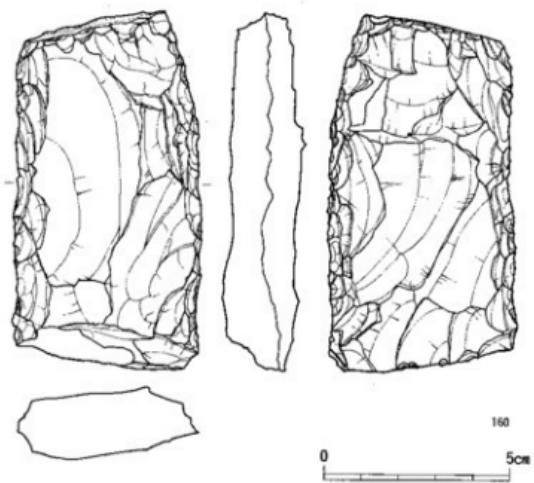
第29図 石器（2）



第30図 石器（3）



第31図 石器(4)



第32図 石器（5）

欠損している。

楔形石器（第30図149～156、図版二十174）

楔形石器には、珪化木製のものが2点含まれる（156・174）。長さと幅が $1.7\text{cm} \times 2.2\text{cm}$ と小型のものから、 $4.0\text{cm} \times 6.9\text{cm}$ と、比較的大型のものまで、大きさは変異に富む。側面には箭断面の認められるものが多く、上下の刃部はつぶれ状となっている。

石核（第31・32図158～160）

石核と判断した石器は5点あるが、必ずしも典型的なものではなく、判断に迷うものも存在する。チャート製のものが1点存在するが、剥離された剥片はわずかである。

158は、拳大の亜角礫を素材としたもので、各所につぶれ状の剥離痕が認められる。良好な剥片はほとんど剥離されておらず、叩き石的な石器と考えたほうが妥当かも知れない。

159は、両面加工石器状の石核である。両側縁から横長～幅広の剥片が剥離されていることが観察できる。縁近くはつぶれが顕著である。

160も、両面加工石器状の石核である。上下両端が折れているため全体の形状は不明であるが、両側縁がほぼ平行する事から、製品である可能性も考えられる。

石包丁（第33図161～164）

石包丁は6点出土しているが、図示した4点はいずれも乳白色の凝灰岩と思われる細粒の石材を素材としたものである。他の2点は、それぞれ緑色片岩、粘板岩を素材としたものである。

が、残存部位が少ないため図示していない。

161・162は外湾刃半月形を呈し、164は直線刃半月形を呈する。穿孔方法は、164では回転穿孔の前に、敲打によって窪みを作っていることがうかがえるが、そのほか穴の大きさから考えて、回転穿孔のみで孔があけられていると考えられる。刃部はいずれも片刃である。

扁平片刃石器（第33図165・166）

165は緑色片岩を素材とするもので、刃部が両刃であるため、正確には扁平片刃石斧とは呼べないが、厚さが薄いことからこの中に含めた。片側縁は両側からの加熱により原型をとどめていない。また、体部のちょうど中程で2つに割れている。

166は緑灰色の極細粒の石材を素材とするもので、裏面の刃部端には使用痕と思われる擦痕が認められる。

大型蛤刃石斧（第34図167～169）

5点出土しているが、完形のものは存在せず、すべて破損しているか、敲石的な用途の石器として転用されている。

167・168は刃部がほとんど平坦となってしまっており、刃の方向と直交して線状痕が観察できる。破損していない168では長さが著しく短く、石斧としては機能し得ないとされる。したがって、線状痕も石斧としての用途以外のものに転用された結果生じたものと考えられる。

169は、刃部から大きく剥離痕が入っており、刃部縁はつぶれている。これもおそらく転用の結果生じたものと思われる。体部の両側縁には、敲打によって小さな窪みが2ヶ所作られている。これは石斧として使用されていたときの着柄の際の滑り止めであろう。

敲石（第35図170）

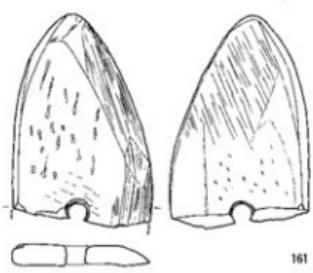
砂岩に類似した粗粒の石材を素材としたもので、一端に敲打痕が観察できる。また、片面の中央付近には、小さな窪みが作り出されている。

砥石（第35図171～173）

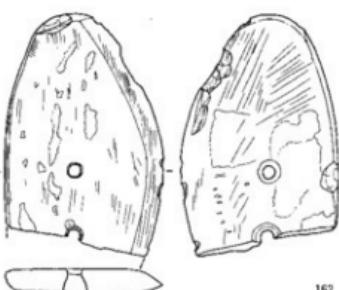
171・172は両端が破損しているが、共に幅約3cm弱の小型の砥石である。石質はやや粗い。

173は粗粒の石材を用いた大型の砥石である。横断面をみると大きく内湾し、中央部には数条の線状痕が認められる。

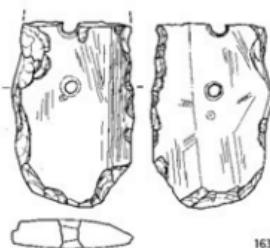
これらの石器の中で、石鎚にみられるような小型の一群や、石包丁にみられるような外湾刃半月形のものは、弥生時代前期の石器の特徴をよく表したものといえよう。



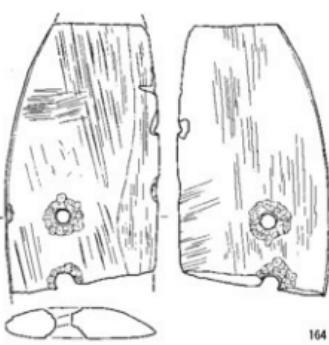
161



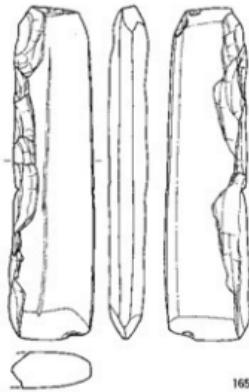
162



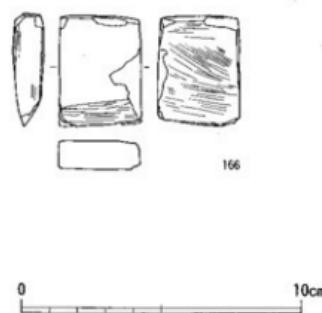
163



164



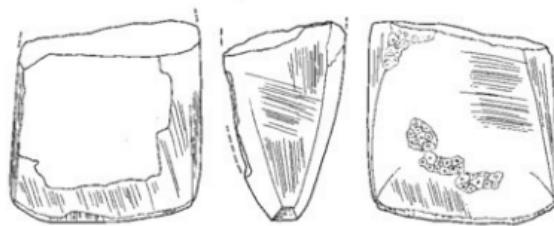
165



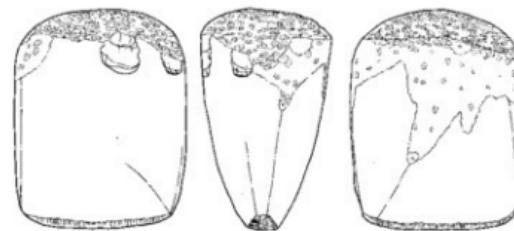
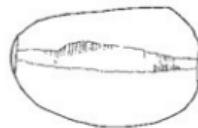
166



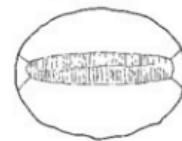
第33図 石器 (6)



167



168

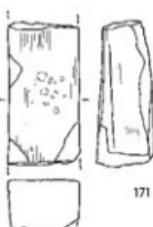


第34図 石器 (7)

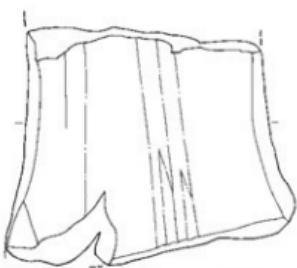


169

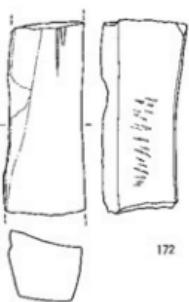
170



171



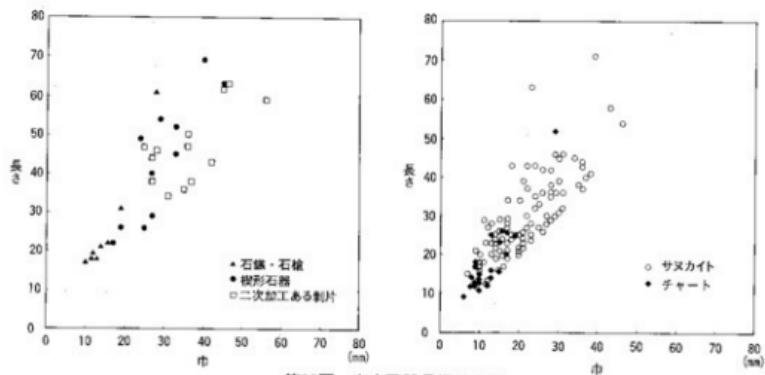
172



173



第35図 石器(8)



第36図 出土石器長幅散布図

第1表 石器一覽表

No.	器類	石材	地区	遺構	層
132	石鏃	サヌカイト	南区		弥生包含層
133	石鏃	サヌカイト	西トレ	壁面	V層
134	石鏃	サヌカイト	南区	溝3西壁面	土器No.5
135	石鏃	サヌカイト	南トレ	南壁断面	V層
136	石鏃	サヌカイト	北トレ		砂層中
137	石鏃	サヌカイト	南区	溝1西壁面	上面
138	石鏃	サヌカイト	南区		弥生包含層
139	石鏃	サヌカイト	南区		弥生包含層
140	石鏃	サヌカイト	南区	中世水田層	
141	石槍	サヌカイト	南区		弥生包含層
142	石錐	サヌカイト	南区		弥生包含層
143	石鋸	サヌカイト	南		弥生包含層
144	石匙	サヌカイト	南区	中世水田層	
145	二次加工ある剥片	サヌカイト	南区	中世水田層	
146	二次加工ある剥片	サヌカイト	南区		弥生包含層
147	二次加工ある剥片	サヌカイト	南区	西壁溝3断面	土器群周辺壁面
148	二次加工ある剥片	サヌカイト	南区		弥生包含層
149	楔形石器	サヌカイト	南区	中世水田層	
150	楔形石器	サヌカイト	南区	中世水田層	
151	楔形石器	サヌカイト	南区		弥生包含層
152	楔形石器	サヌカイト	南区	溝3西壁面	土器No.5
153	楔形石器	サヌカイト	南区	中世水田層	
154	楔形石器	サヌカイト	西トレ	溝1付近	IV層
155	楔形石器	サヌカイト	西トレ	溝1付近	IV層
156	楔形石器 珪化木	サヌカイト	南区	中世水田層	
157	楔形石器	サヌカイト	北区		暗灰色砂質土層
158	石核	サヌカイト	南区		弥生包含層
159	石核	サヌカイト	南区		弥生包含層
160	石核	サヌカイト	西トレ	溝3西壁面	No.5
161	石包丁	凝灰岩?	南区	溝3	

162	石包丁	凝灰岩?	南区		弥生包含層
163	石包丁	凝灰岩?	南区		弥生包含層
164	石包丁	凝灰岩?	南区		弥生包含層
165	扁平片刃石斧	綠色片岩	南トレ	溝2より東	暗灰黑色粘質土
166	扁正片刃石斧	不明	北区		灰色粘質土層
167	大型蛤刃石斧	不明	南区		弥生包含層
168	大型蛤刃石斧	不明	南区		弥生包含層
169	大型蛤刃石斧	不明	南区	側溝	弥生包含層以下
170	叩石	不明	南区	溝3西壁面	土器No.5
171	砥石	不明	北トレ	旧河道上面	褐色砂層
172	砥石	不明	北区	暗灰色砂質土	
173	砥石	砂岩	西トレ	溝1	
174	楔形石器	珪化木			

第3節 木 器

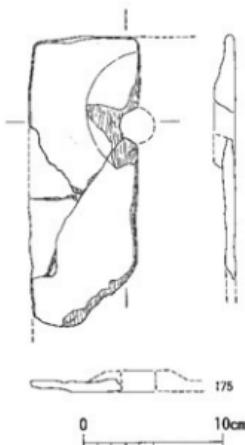
鍬 (第37図175)

溝1から出土した平鍬である。柄孔から縦半分に割れ刃部を欠く。柄孔周辺には、舟形の隆起面を持つ。復元幅は約16cmを測り、広鍬に分類できる。

第4節 そ の 他

石帶 (第38図176)

北区第9層出土の巡方である。透し穴ではなく、裏面には長辺と平行に潜穴がある。亀田分類のF1にあたる。長さ4.2cm、幅3.9cm、厚み0.75cmを測る。石材はカルセドニーの一種であろう。



第37図 木器

第38図 石帶

第5章 花粉化石からみた弥生時代以降の環境変遷

パリノ・サーヴェイ（株）

はじめに

上ノ島遺跡は、兵庫県尼崎市上ノ島、武庫川下流域に広がる沖積平野（尼崎平野）に位置する。これまでの発掘調査により、弥生時代前期から近世にわたる遺構・遺物が確認されている。

今回の自然科学分析調査では、本遺跡周辺地域の弥生時代以降の古植生の変遷を推定するために、花粉分析を行った。

1. 分析調査地点の層序

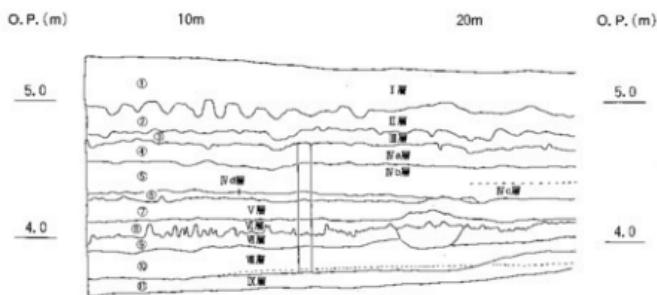
今回の分析調査は、南トレンチ南壁地点を対象とした。調査地点の断面図および試料採取位置を第39図に示す。調査地点の土層は、発掘調査担当者により①～⑪層の17層に分層され、基本層序の層位名としてⅠ層～Ⅹ層まで命名されている。以後、この層位名を用いる。Ⅹ層上面が弥生時代前期の遺構確認面、Ⅵ層が弥生時代前期～古墳時代の遺物包含層、Ⅴ層が中世の水田耕土、Ⅳa層が江戸時代の水田耕土とされる。

分析試料は、発掘調査担当者により、Ⅳa層からⅨ層まで連続する柱状試料として採取された。当社において試料の観察を行った結果では、Ⅳa層～Ⅴ層が褐灰色～黄褐色砂質シルト、Ⅵ層が黒褐色砂質シルト、Ⅶ層が黒灰色シルト、Ⅷ層が青灰色シルトであった。採取試料の層相および分析目的を考慮し、花粉分析試料を抽出した。（第40図）

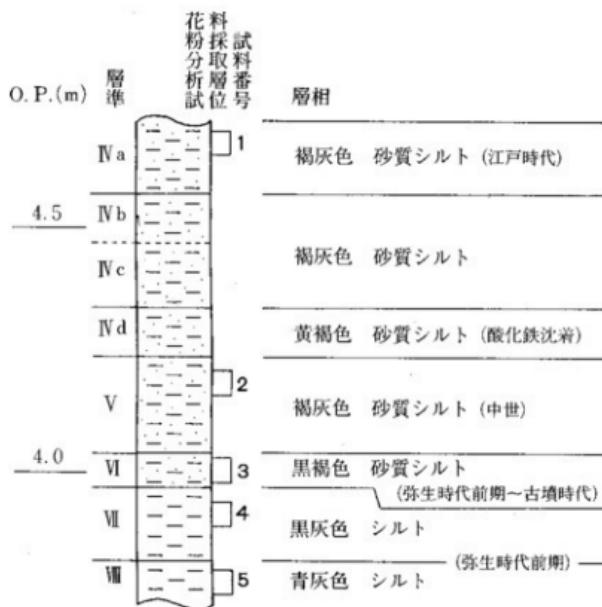
2. 分析方法と結果の表示法

花粉・胞子化石は、湿重約10gの試料について、HF処理、重液分離（ZnBr₂：比重2.2）、アセトリシス処理、KOH処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入しプレラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。また、出現するイネ科花粉100個以上について、ノマルスキー微分干渉装置を使用して表面微細構造を観察し、発芽孔周辺の肥厚状況・花粉粒径を考慮しながら、栽培植物のイネ属と他のイネ科に区分する。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として百分率で算出する。また、図表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。また、イネ属の同定結果は、イネ科総数に対してイネ属が占める割合であるイネ属比率（鈴木・中村、1977）として示す。



第39図 試料採取地点図



第40図 試料採取地点の模式柱状図

(層相記載は、当社の観察結果である)

3. 花粉化石の産状

分析結果を第2点・第41図に示す。花粉化石は、IVa層（試料番号1）以外で比較的良好に出現する。IVa層では保存の良いアラナ科花粉が多産するが、本種類以外の化石の保存状態が極めて悪いことから、堆積後に攪乱などの影響により二次的に取り込まれた花粉である可能性が強い。したがって、本試料については花粉化石を統計的に扱うことは避けた。

Ⅳ～V層（試料番号5～2）の花粉化石群集の層位の変化はほとんど見られない。木本花粉では、スギ属、コナラ属アカガシ亜属が高率に出現する。このほかにマツ属、イチイ科一イヌガヤ科ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、クリ属シイノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が高率に出現する。このほかにヨモギ属や水生植物のガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属を伴う。

栽培植物とされるイネ属は、VI層・V層（試料番号3・2）で検出される。イネ属比率はVI層が37%、V層が41%である。Ⅳ層・Ⅴ層（試料番号5・4）はイネ科花粉化石の表面微細構造が壊れているため、イネ属を同定することはできなかった。また、V層では畑作植物とされるソバ属が検出される。

4. 花粉化石からみた遺跡周辺の古植生

今回の分析調査地点が沖積地に位置することから、堆積物中の花粉化石には周辺地域から運搬・堆積したものも含まれている可能性が強い。すなわち、本群集は周辺地域の広い範囲の植生を反映している可能性がある。この点を考慮して、当時の周辺植生や耕作について検討を行う。

（1）周辺植生

各試料の花粉化石群集は、いずれもスギ属や暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素であるアカガシ亜属が多産する。この他に、暖温帯に分布の中心があるマキ属、ヤマモモ属などを伴う。のことから、弥生時代前期から中世にかけて、本遺跡周辺の植生に大きな変化は見られず、暖温帯常緑広葉樹林と呼ばれる植生が存在していたと推定される。また、スギも当時の植生を構成する重要な種類であったと判断できる。

大阪湾沿岸部では、約6,500年前以降は暖温帯常緑広葉樹林であったと推定されている（前田、1984）。また、約3,000年前には気候の冷涼化や降水量の増加に起因し、暖温帯と冷温帯の推移帶（中間温帯）で森林を形成するスギ属・イチイ科一イヌガヤ科ヒノキ科・コウヤマキ属などの針葉樹が周辺の山地などで増加するとされている（郡須、1989）。本群集でスギ属が多産することは、これと同様なことを示していると思われる。

一方、遺跡付近の低地などには、主にイネ科植物が生育していたと判断できる。また、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属・キカシグサ属などの水生植物も検出されることより、弥生時

代前期から中世にかけて、周囲には水湿地のような状態であったと推定される。

(2) 栽培植物について

V層・VI層ではイネ科花粉化石の保存が悪いため、栽培植物のイネ属が含まれているか否かは判別できなかった。したがって、弥生時代前期とされるV層・VI層が堆積した頃に、稻作が行われていたか否か判断できなかった。また、VI層・V層が堆積頃になると、イネ科の中でイネ属が30%以上出現する。現在の水田耕土における花粉の動態研究によれば、イネ科の中でイネ属が占める割合（イネ属比率）が30%以上を示すとされており、この値が過去における稻作を検討する際の目安になるとされている（鈴木・中村、1977）。これに基けば、VI層・V層が堆積した頃に、本遺跡では稻作が行われていた可能性がある。また、水田耕作土内にはサジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属などの水湿地生植物が水田雑草として生育していた可能性がある。さらに、V層が堆積した頃になると、周辺では稻作の以外にもソバなどの栽培が行っていたことも推定される。

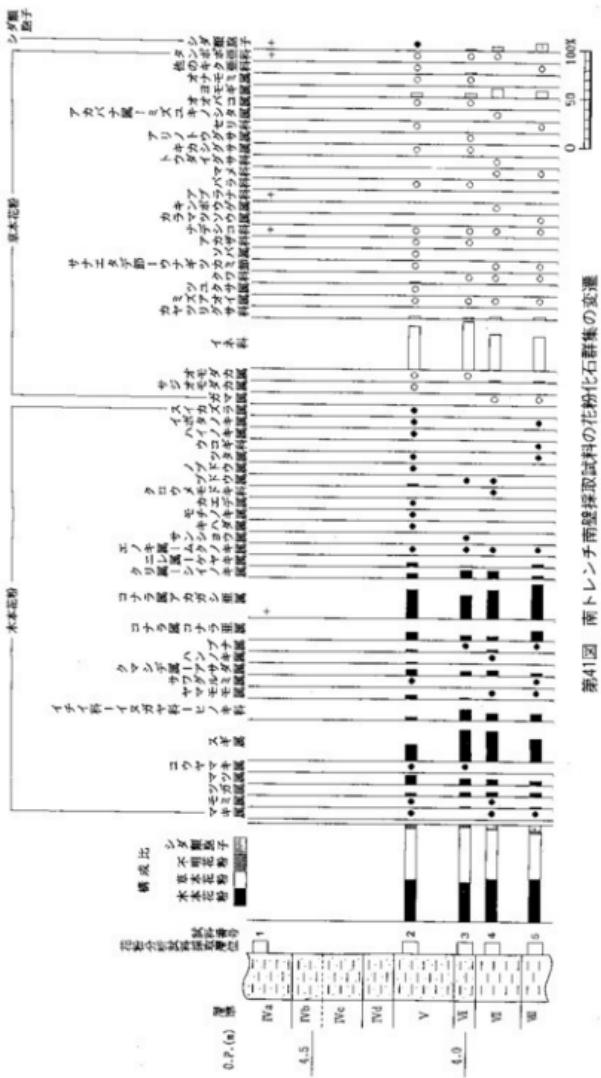
以上のように、本遺跡周辺域においては、少なくとも古墳時代には既に稻作が行われていたと推定される。また、弥生時代前期における稻作については、イネ科花粉化石の保存状態が悪いため判断できなかった。この点に関しては、今後さらに調査地点を設定し、花粉分析とともに植物珪酸体分析・種子同定などの様々な自然科学分析を応用する必要があろう。

〈引用文献〉

- 前田保夫（1984）花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷。
日本植生誌、近畿、宮脇、昭編著、至文堂、p87-100.
- 那須孝悌（1989）活動の舞台：概論、弥生文化の研究1、弥生人とその環境、水井昌文・
那須孝悌・金関恕・佐原眞 編、p119-130.
- 鈴木功夫・中村 純（1977）稻科花粉の堆積に関する基礎的研究、文部省科研費特定研、
古文化財、稻作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究－中間報告－（中村 純編）、
p1-10.

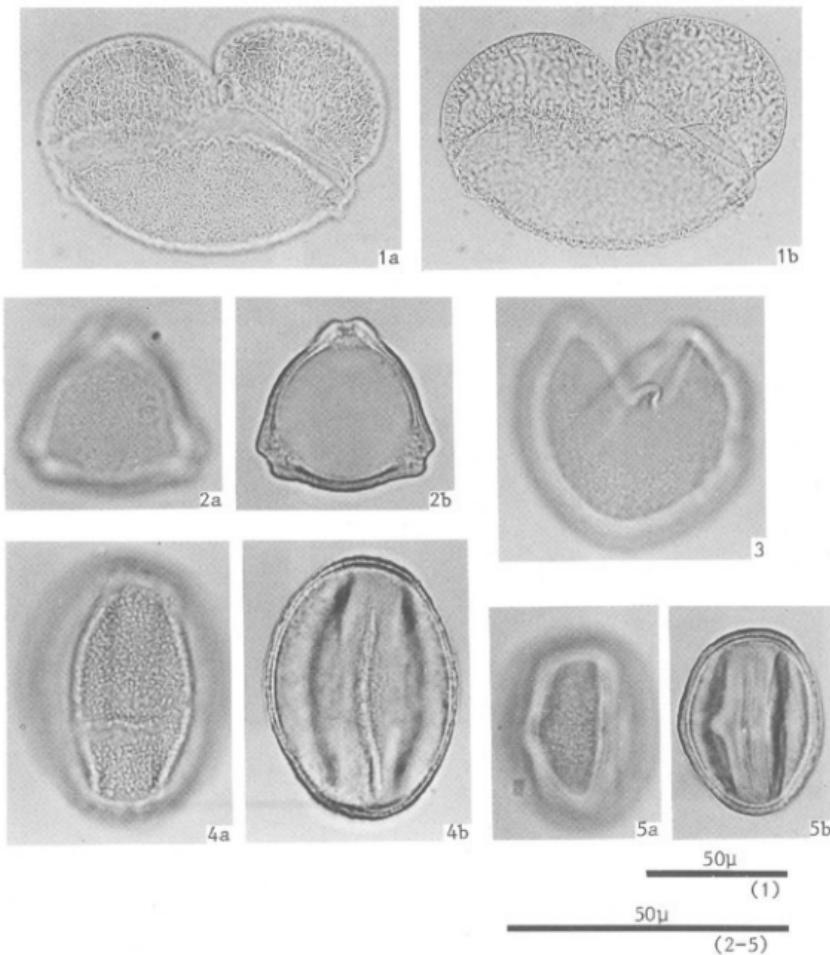
第2表 花粉分析結果表

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5
木本花粉						
マキノ属	-	1	-	2	2	
モミ属	-	1	4	1	3	
ツガ属	-	8	10	10	9	
マツ属	-	20	17	13	8	
コウヤマキ属	-	1	1	-	-	
スギ属	-	40	88	77	46	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	8	31	17	14	
ヤマモチ属	-	10	4	1	2	
サワグルミ属	-	1	-	-	1	
クマシデ属-アサダ属	-	13	10	12	6	
ハンノキ属	-	3	2	2	-	
ブナ属	-	5	1	4	1	
コナラ属-コナラ属	-	15	15	10	21	
コナラ属-アカガシ属	2	70	68	73	73	
クリ属-シイノキ属	-	11	22	19	6	
ニレ属-ムクノキ属	-	9	4	-	7	
エノキ属-ムクノキ属	-	1	2	1	2	
サンショウ属	-	-	-	-	-	
キハダ属	-	-	1	-	-	
モチノキ属	-	-	-	-	-	
カエデ属	-	-	-	-	-	
クロウメモドキ科	-	-	-	-	-	
クドウ属	-	-	5	2	-	
ノブドウ属	-	-	1	-	-	
ツタ属	-	-	-	-	-	
ウコギ科	-	-	-	-	-	
ハイノキ属	-	-	-	-	-	
イボタ属	-	-	-	-	-	
スイカズラ属	-	-	-	-	-	
草本花粉						
ガマ属	-	-	-	1	1	
サジオモダガ属	-	-	-	-	-	
オモダガ属	-	-	5	7	5	
イネ科	-	232	330	196	151	
カズアオイ属	-	9	7	10	8	
ツユクサ属	-	2	4	5	3	
クワ科	-	1	-	-	-	
サンエタデ節-ウナギツカミ節	-	6	4	2	2	
ソバ属	-	1	-	2	1	
アカサ科	-	1	2	-	-	
ナデシコ科	-	1	2	-	-	
カラマツツヅクサ属	1	-	2	-	-	
キンポウゲ属	-	-	-	-	-	
ブランナ科	66	-	-	-	-	
バラ科	-	2	2	-	-	
マメ科	-	-	-	-	-	
トウダイグサ科	-	-	-	-	-	
カキシガサ属	-	2	1	-	-	
アリノトウクサ属	-	-	-	1	-	
セリ科	-	2	-	-	2	
アカバナ属-ミズユキノシタ属	-	-	-	1	-	
オオバコ属	-	1	1	-	-	
ヨモギ属	-	20	24	50	32	
オナモミ属	-	-	1	-	-	
他のキク科	-	3	8	-	2	
タンポポ属科	1	1	1	2	-	
不明花粉	-	23	16	8	11	
シダ類孢子		1	2	7	20	34
合計		2	235	279	245	204
木本花粉	68	288	392	280	211	
木本明瞭花粉	0	23	16	8	11	
シダ類孢子	1	2	7	20	34	
総花粉	71	548	694	553	450	



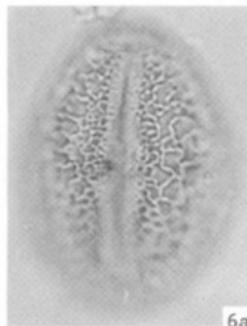
第41図 南トレンチ南壁採取試料の花粉化石群集の変遷

出典は、木本花粉は木本花粉地質、木本花粉・シダ相粒子は木本花粉より不規則形を除くを
おいて出現した個数 (taxa) を示す。



1. マツ属 (試料番号; 2)
 2. ヤマモモ属 (試料番号; 2)
 3. スギ属 (試料番号; 2)
 4. コナラ属コナラ亜属 (試料番号; 2)
 5. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号; 2)

第42図 花粉化石の顕微鏡写真 (1)



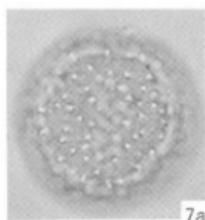
6a



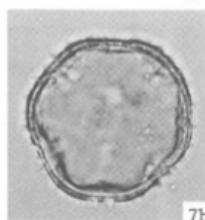
6b



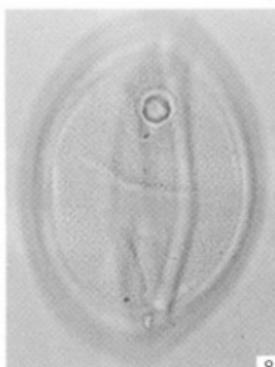
6c



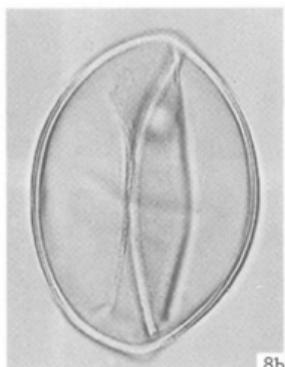
7a



7b



8a



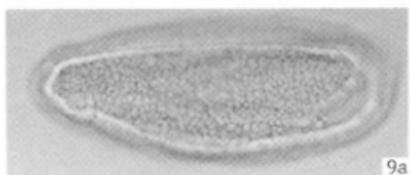
8b

50 μ

6. キハダ属 (試料番号; 2)
8. イネ科 (試料番号; 2)

7. オモダカ属 (試料番号; 2)

第43図 花粉化石の顕微鏡写真 (2)



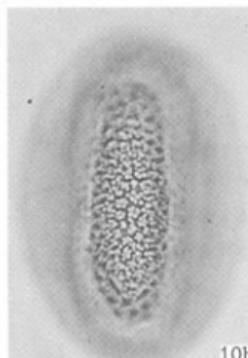
9a



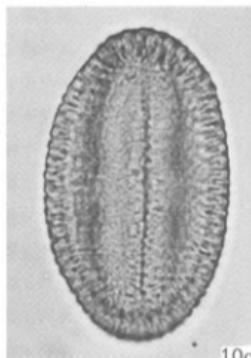
9b



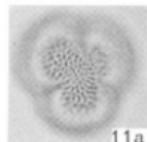
10a



10b



10c



11a



11b

50 μ

9. ミズアオイ属 (試料番号; 2)
11. アブラナ科 (試料番号; 1)

10. ソバ属 (試料番号; 2)

ネガ説明

ネガ番号	花粉化石名	試料番号	標本番号	ネガ倍率
1	マツ属	2	4343	150
2	マツ属	2	4343	150
3	スギ属	2	4344	300
4	スギ属	2	4344	300
5	ヤマモモ属	2	4345	300
6	ヤマモモ属	2	4345	300
7	コナラ属コナラ亜属	2	4346	300
8	コナラ属コナラ亜属	2	4346	300
9	コナラ属アカガシ亜属	2	4347	300
10	コナラ属アカガシ亜属	2	4347	300
11	キハダ属	2	4348	300
12	キハダ属	2	4348	300
13	キハダ属	2	4348	300
14	オモダカ属	2	4349	300
15	オモダカ属	2	4349	300
16	イネ科	2	4350	300
17	イネ科	2	4350	300
18	ソバ属	2	4352	300
19	ソバ属	2	4352	300
20	ソバ属	2	4352	300
21	ソバ属	2	4352	300
22	ミズアオイ属	2	4351	300
23	ミズアオイ属	2	4351	300
24	アブラナ科	1	4353	300
25	アブラナ科	1	4353	300

ただし、ネガ番号4、20は図版に使用していない。

第6章 まとめ

今回の調査は、上ノ島遺跡の弥生時代集落本体と考えられる立花中学校グランド北の県営住宅地約730m²を対象とした。その結果、弥生時代前期の溝を3条確認している。さらに、溝の北東では平安末の遺構を発見し、弥生時代後期から古墳時代、奈良時代、平安時代にかけての遺物も検出している。従来、弥生時代前期のみの単純遺跡と捉えられていたが、周辺には後世の遺跡も存在していたのである。

最後に、遺跡の集落変遷と各時代の遺構の性格を記してまとめにかえたい。

縄文時代以前

北西から南東に流れる幅約13mの河道が存在したようである。この河道には自然遺物のみで、土器・石器等の人工遺物は認められない。

弥生時代～古墳時代

以前の調査では、縄文時代の突帯文土器が弥生時代前期の土器とともに出土したことが報告されている。周辺の最近の調査でも、神戸市大開遺跡・伊丹市口酒井遺跡等の共伴例が増加してきた。これは、突帯文土器の時期に縄文の村が弥生の村に転換したことであろう。

上ノ島遺跡でも、こうして武庫川流域最古の水稻耕作が開始された訳である。そして、前期I-c・II-a段階に盛期を迎えてるのである。

今回発見した溝は、当該期の居住区の北東を限るものと捉えられ、出土土器からみると溝1は前期前半の後葉の時期に、次いで前期後半の前葉の時期の2・3と徐々に外方に拡大していくことが理解できよう。遺跡本体東の後背湿地には水田の存在も考慮され、溝は用水路の可能性も考えられる。花粉分析では、イネ科花粉化石の保存が悪く稲作の判断はできなかった。

しかし、弥生時代前期II-b段階をもってこの村は、突然廃絶してしまうのである。おそらく武庫川の洪水がその原因と考えられ、人々は伊丹設丘上の武庫庄遺跡等へ移動したのである。

再び、この三角州に人類が登場するのは弥生時代の後期なのであろうか。

遺物をみると、弥生時代後期から古墳時代前期に新たな村が登場してくるようであるが、内容は明らかでない。4世紀後半築造と考えられる当遺跡の南に所在するの堂古墳との関係に注意する必要があろう。

次に、6世紀末から飛鳥時代にかけての遺物が認められ、集落も存在していたようである。しかし、遺構が残存しておらず、詳細なことは明らかにできない。

奈良・平安時代

「武庫川の 水脈を速みか 赤駒の あがく激ちに 濡れにけるかも」
「武庫の海の 庭良くあらし いざりする 海人の釣舟 波の上見ゆ』『万葉集』から引用
引き続き、この時期の遺物も検出している。特に石帶の発見は官人の存在を示し、何らかの施設があったのであろう。注意しなければならないのは、遺跡の西にあたる牛鶴駅町田の開発で、当遺跡南東の桂木遺跡等との関係である。

中世

水田地として、生産域の場となっている。花粉分析結果もこれを裏付ける。なお、若干ではあるがこの時期の土器の出土から周辺には集落も存在したと思われる。

近世

引き続き水田地として、生産域の場となっている。注目されるのは畝状造構の存在で、花粉分析では残存状況が悪く結果が出なかったが、おそらく水稻栽培とともに商品作物である綿花の栽培がなされていたのであろう。

この時期にも武庫川が氾濫をくりかえし、水田は洪水に襲われたとみえ、造構は洪水砂に覆われていた。洪水砂中から出土した陶磁器で年代を推定すれば、18世紀初めと考えられ、文献資料にいう正徳2年（1712）の大水害にあたるのではないかと推測している。

参考文献

1. 尼崎市教育委員会 『尼崎市上ノ島遺跡』 尼崎市文化財調査報告第8集 1973年
2. 尼崎市教育委員会 『尼崎市栗山・庄下川遺跡、桂木遺跡』 尼崎市文化財調査報告第9集 1974年
3. 尼崎市役所 『尼崎市史』 第1巻・第11巻 1966年・1980年
4. 尼崎市教育委員会 『尼崎市武庫庄遺跡』 尼崎市文化財調査報告第21集 1990年

図版

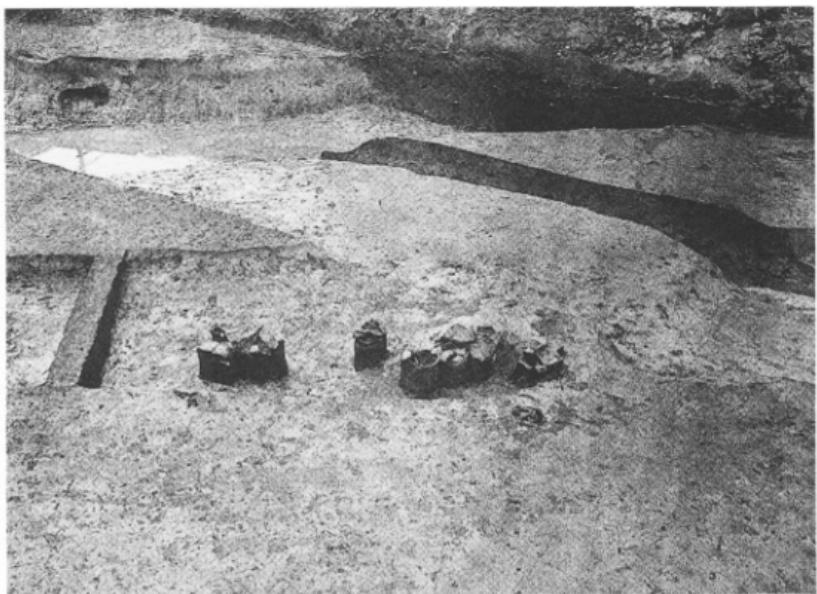
図版一 調査地区・南区



調査地区遠景



南区 弥生時代満1・2・3 全景（東から）



南区 溝2 土器出土状況（東から）



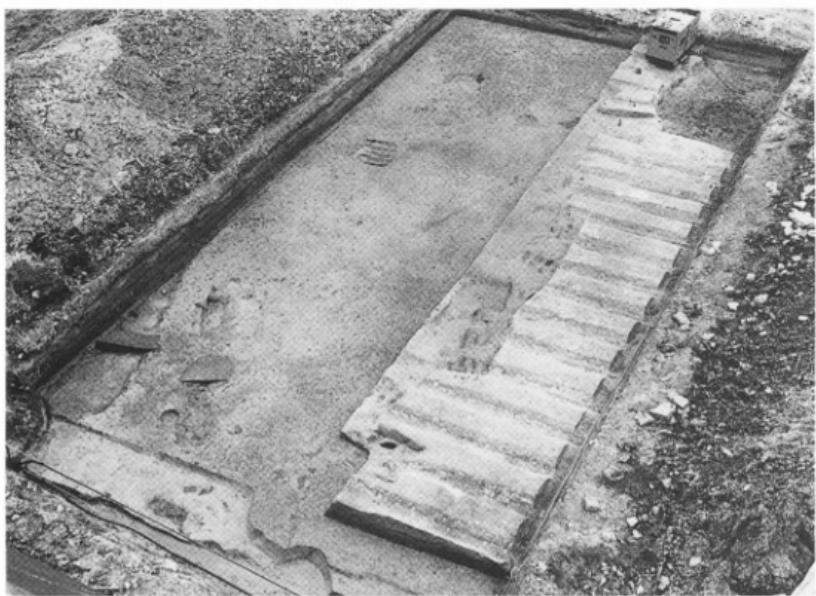
南区 微高地土器出土状況（東から）



南区 溝1 土層断面（北から）



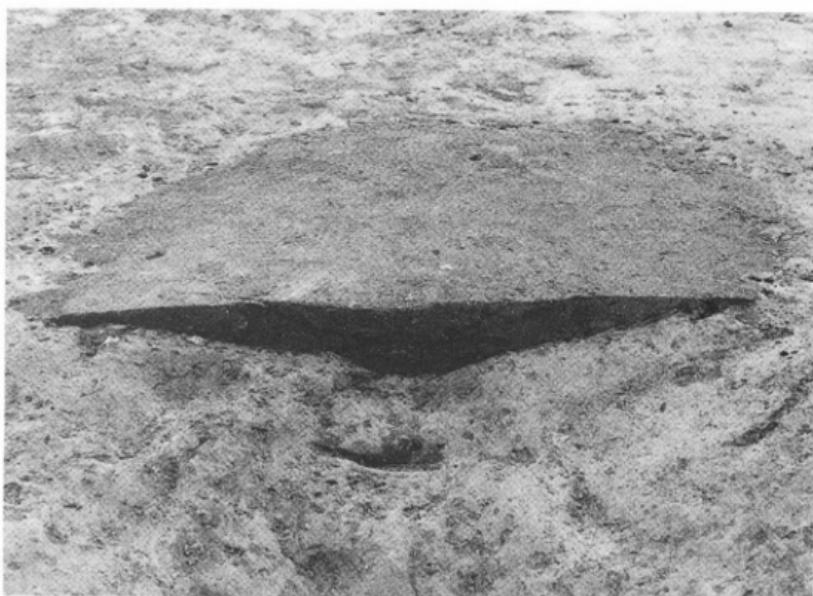
南区 近世遺構面（西から）



北区 平安時代遺構面と近世塁（西から）



北区 溝4 全景（西から）



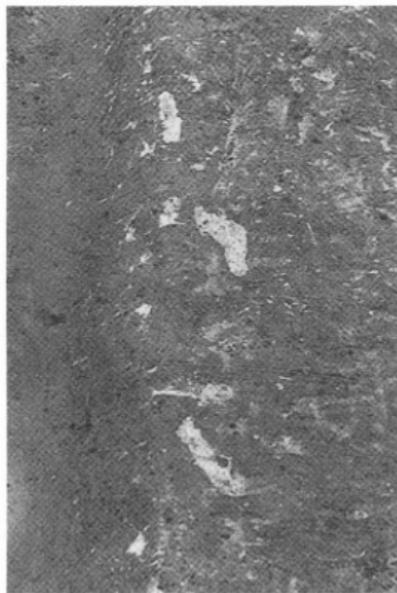
北区 土壇1 全景（西から）



北区 石帶出土状況（南から）



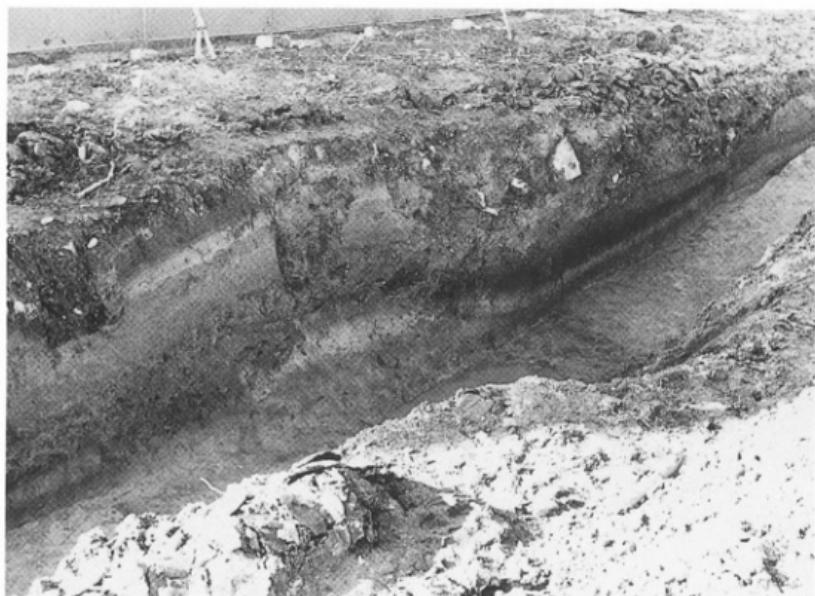
北区 近世遺構面畠（西から）



北区 近世遺構面足跡（南から）



図版七 確認トレンチ



西トレンチ（南東から）



西トレンチ 溝3 土器出土状況（東から）

図版八 確認トレンチ



南トレンチ（北東から）



中トレンチ（西から）

図版九 弥生土器



7



16



32



39



26



36

図版十 弥生土器



37



49



27



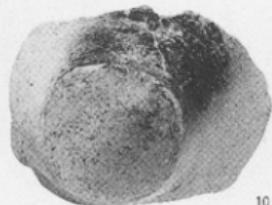
46



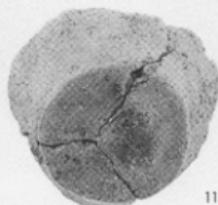
40



56

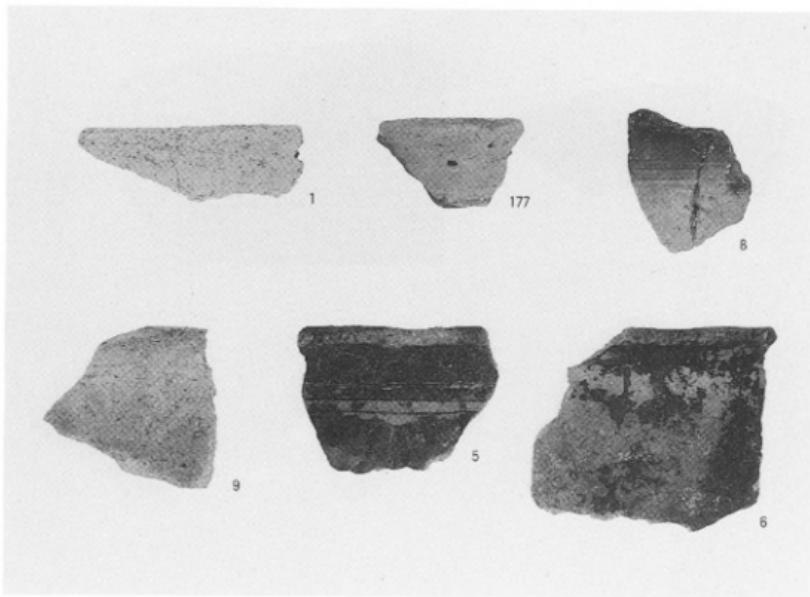
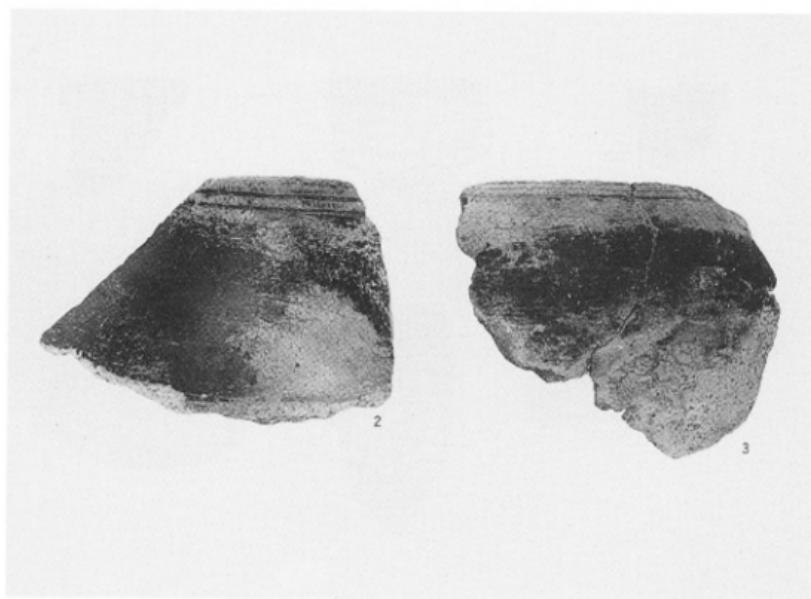


10

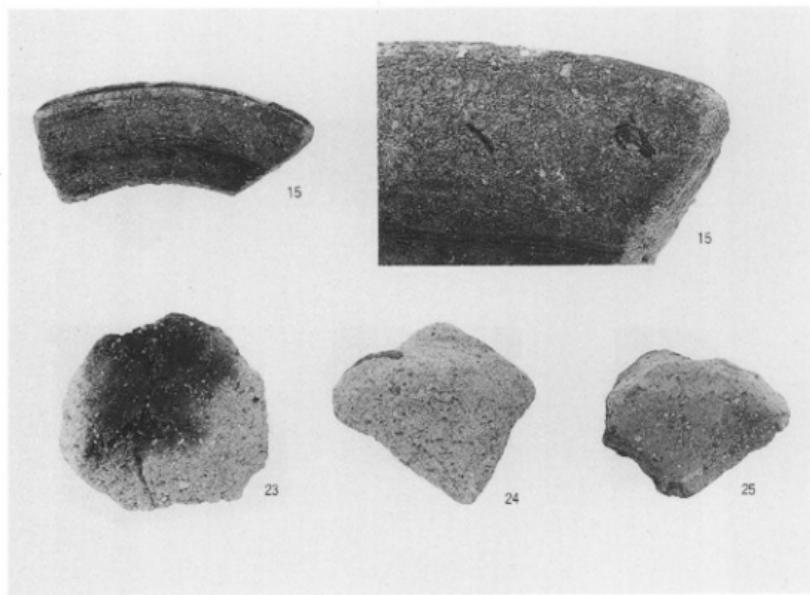
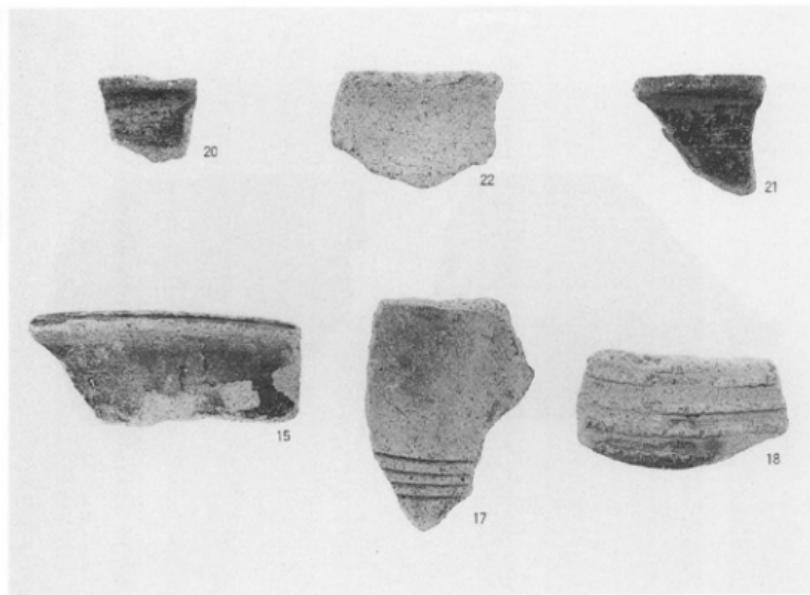


11

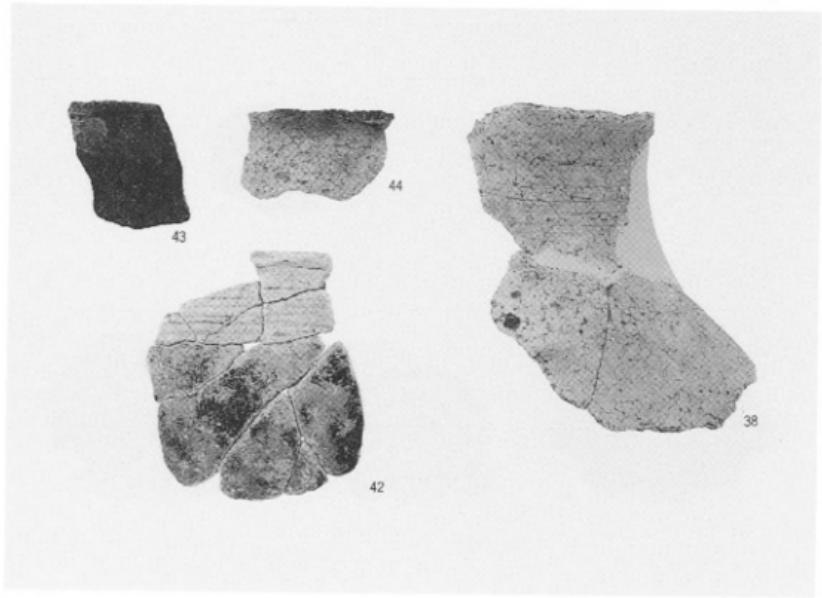
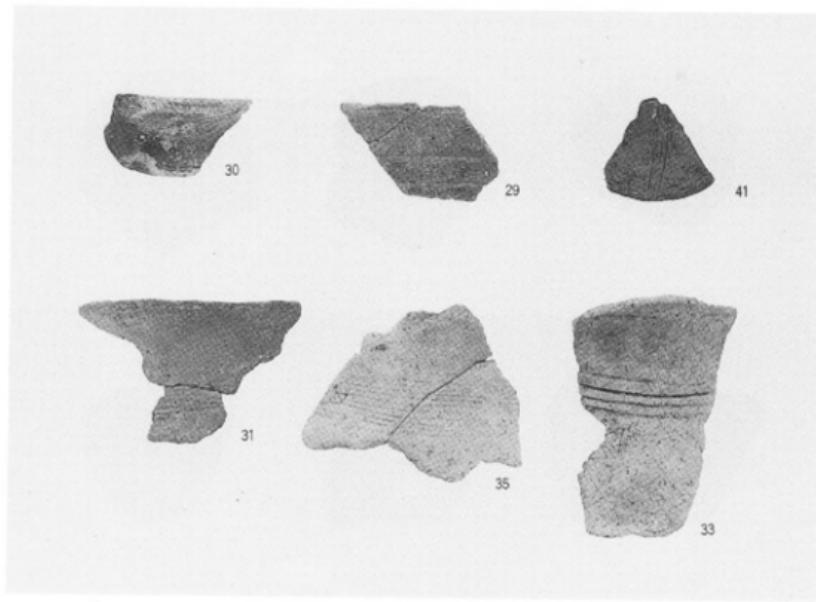
図版十一 弥生土器



図版十二 弥生土器



図版十三 弥生土器



圖版十四 弥生土器



178



47



48



51



52



53



57



61



60

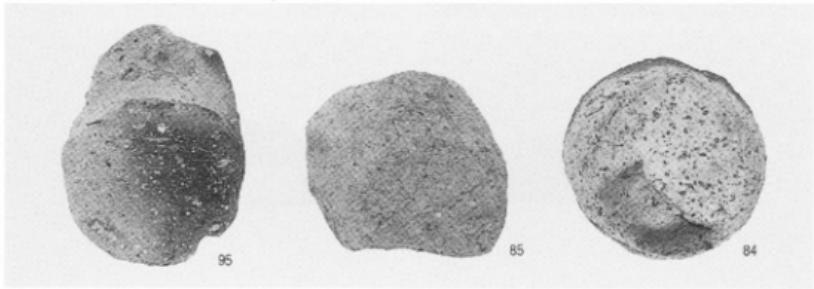
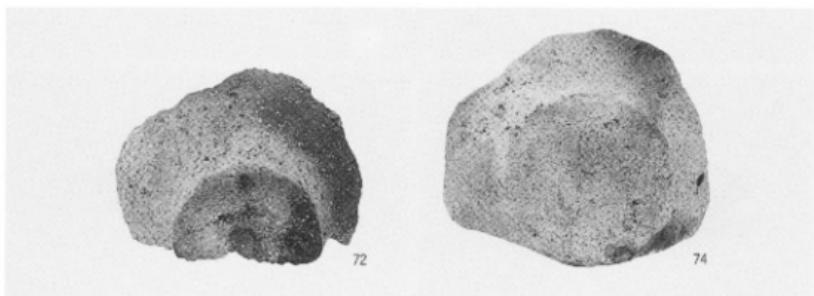
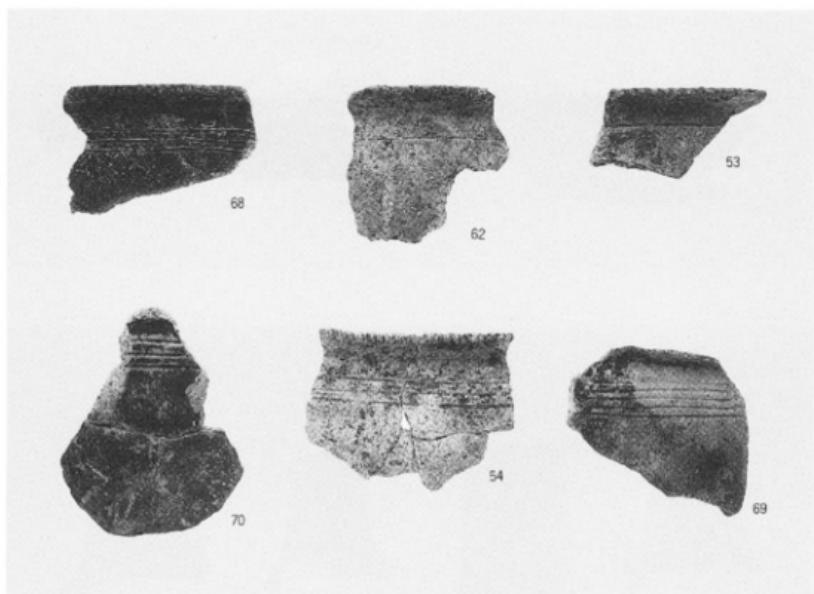


59



58

圖版十五 弥生土器



図版十六 須恵器、土師器



97



96

98



102



103



179



101



109



108

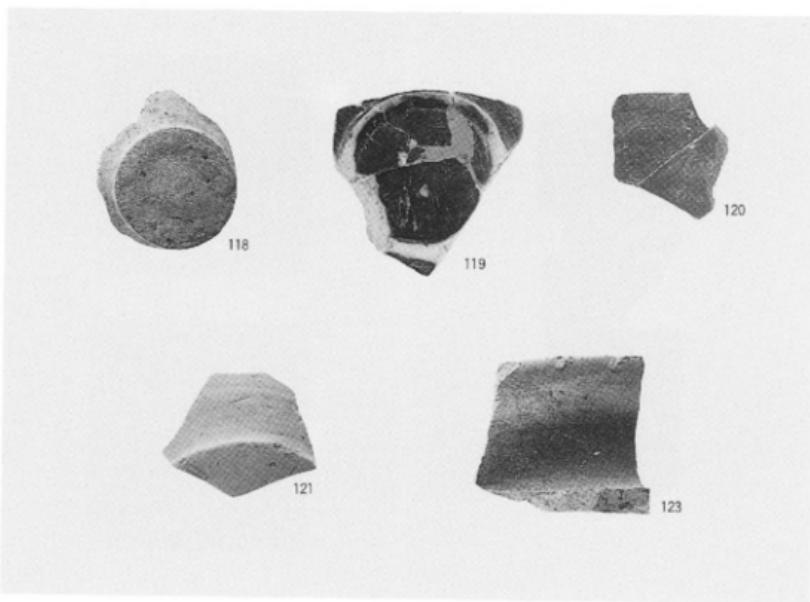
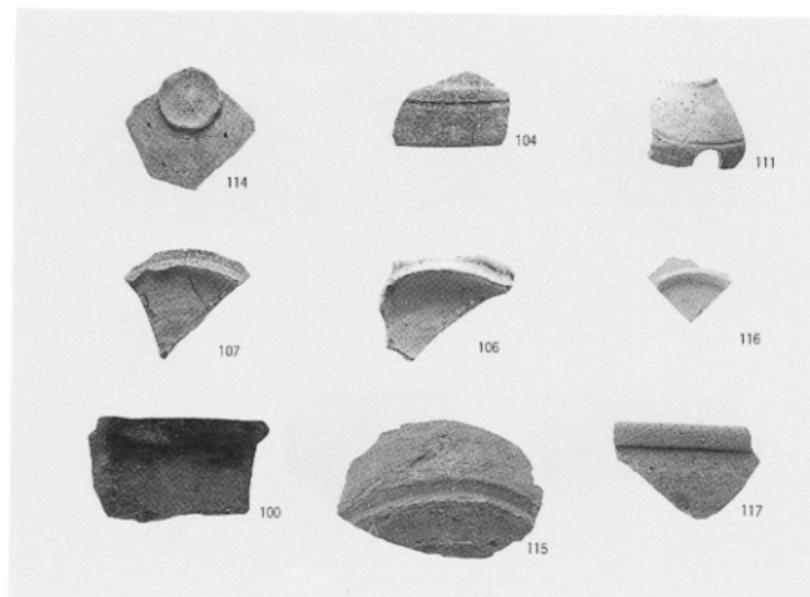


112

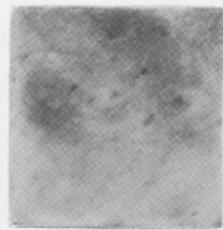
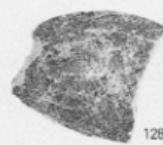


113

図版十七 須恵器、土師器、灰釉陶器、弥生土器、瓦器、黒色土器



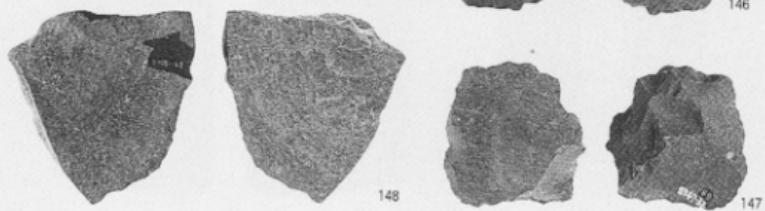
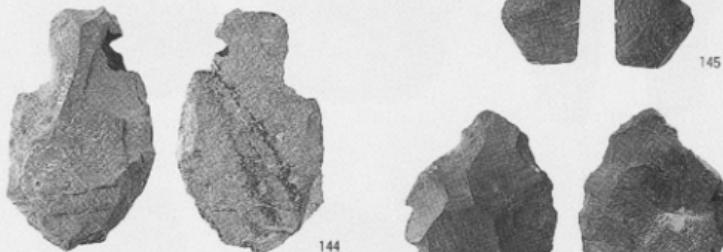
図版十八 陶磁器、瓦器、須恵器、土師器、木器、石器



175

176

図版十九 石器



圖版二十一 石器



圖版二十一 石器



158



159



161



162



163



164

図版二十一 石器



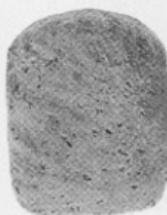
166



167



165



168



170



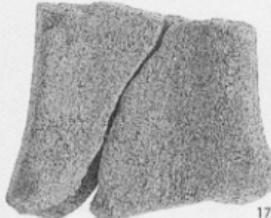
170



171



172



173

兵庫県文化財調査報告書 第105冊

上ノ島遺跡

一県公営住宅尼崎立花第1団地改築工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書一

平成4年3月10日 印刷
平成4年3月15日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5 電話 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 水山産業株式会社
〒653 神戸市長田区二番町3丁目4-1 電話 078-577-3757